

# 阿武隈川上流域における 縄文中期から後期への集落変化

## 福島県三春町柴原A遺跡と越田和遺跡の発掘調査から

Change of Colony in the Upper Reaches of the Abukuma River  
from the Middle to the Late Jomon Period :  
From the Excavation Survey of the Shibahara A Site and the Koshitawa Site  
in Miharu-machi, Fukushima Prefecture

福島雅儀

FUKUSHIMA Masayoshi

はじめに

①時間軸, 土器型式の整理

②住居の変化

③その他の集落施設

④越田和遺跡の集落変化

⑤柴原A遺跡の集落

⑥集落の変化

おわりに

### 【論文要旨】

縄文時代中期から後期に移る期間, 土器型式で4型式程度である。土器編年の相対的時間からみれば短い時間幅である。ところが炭素年代測定による絶対年代によれば, それは500年以上の時間であるという。これが正しいとすれば, これまでの考古学的解釈は大きく見方を変えなくてはならなくなった。そこで小論では, 阿武隈川上流域の柴原A遺跡と越田和遺跡の発掘調査成果をもとに当時の集落変化について考えてみた。

縄文時代中期末葉の集落の中心施設は, 複式炉をともなう竪穴住居である。このほか水場遺構と土器棺墓が検出される程度である。後期初頭には, 石囲炉をともなう4本主柱の竪穴住居が造られ, 屋外土器棺墓が増加する。また掘立柱建物も受容される。続いて, 掘立柱建物が増加するとともに, 柄鏡形敷石住居・石配墓も導入される。さらに後期前半でも新しい段階の柴原A遺跡では, 平地式敷石住居, 広場, 石列, 石配墓群, 焼土面による集落に変化した。

東北地方に広く分布するとされた複式炉も, 上原型に限定するとそれは阿武隈川上流域から最上川上流域, 阿賀川流域に特徴的な炉であった。また石囲炉を伴う4本主柱の住居は, 阿武隈川上流域に限定的に分布している。敷石住居においても, 柄鏡の柄が大きく発達した平地式敷石住居は, やはり阿武隈川上流域を主な分布圏としている。そして, 集合沈線による地域色を持った土器が作られている。阿武隈川上流域は, 仙台湾沿岸地域と関東平野を結ぶ通路ではあったが, この時期, 南北の両地域とは異なる特異な生活様式を創造していたといえよう。

また, この期間土器型式が連続していた遺跡でも, 営まれた集落は断続をくり返していた。集落の規模も20名程度であった。大規模に見えた集落も小集落の重複による累重の結果であった。

【キーワード】 縄文集落, 複式炉, 敷石住居, 柴原A遺跡, 越田和遺跡

## はじめに

東北地方南部，阿武隈川上流域において，縄文時代の集落景観は縄文時代中後期の移行期に急変する。竪穴住居から平地式建物へ，複式炉から石囲炉へ，そして敷石住居受容，屋内墓から屋外配石墓，石列区画施設の出現など，さらに貯蔵用大型土坑群の出現と衰退などである。土器型式期で数型式の間である。小論ではこの一端について，阿武隈川の支流，大滝根川流域に位置する三春町越田和遺跡と柴原A遺跡の発掘調査結果から考えてみた。

阿武隈川は，奥羽山脈と阿武隈高地に挟まれた地溝帯の中央部を南北に貫いて北流し，仙台湾に至る東北地方南部の大河である。この流域は，「中通り」とも呼ばれるように，仙台湾と関東平野を結ぶ主要な交通路である。ここでいう阿武隈川上流域とは，二本松丘陵より南からの流域である。



図1 三春ダムと関連遺跡 1 西方前遺跡 2 春田遺跡 3 柴原A遺跡 4 柴原B遺跡 5 越田和遺跡 6 四合内B遺跡 7 仲平遺跡 8 蛇石前遺跡

阿武隈高地は、標高 550 ～ 700 m のなだらかな丘陵地帯である。その所々に、標高 1,000 m を越える隆起平原の残丘が聳えている。高原の東側は、双葉断層による急峻な斜面から、海岸段丘を介して太平洋に至っている。一方西縁部は、小河川により出入ある複雑な地形の丘陵地帯が発達している。現在の植生は、落葉広葉樹林である。この丘陵地帯は、中生代の花崗閃緑岩を基盤とし、地表面はその風化土である砂土で覆われている。つまり、雨水による侵食が盛んな地質であり、丘陵の斜面は常に侵食と堆積が継続していた。この地形と資質により、丘陵裾部に立地する縄文時代の遺跡では、当時の地表面がそのまま遺存していることも少なくない。三春町柴原 A 遺跡と同町越田和遺跡も、そのような遺跡である。

大滝根川は、阿武隈高地のほぼ中央に位置する大滝根山麓から西流して、郡山市街の南東端で阿武隈川に流入している。全長 51km の小河川である。越田和遺跡と柴原 A 遺跡は、三春ダム建設とともに発掘調査が実施された。三春ダム関連の発掘調査で縄文時代中期～後期の遺跡は、西方前遺跡、春田遺跡、柴原 A・B 遺跡、蛇石前遺跡、仲平遺跡、越田和遺跡、四合内 B 遺跡の 8 遺跡がある。このうち柴原 B 遺跡までの 4 遺跡が大滝根川沿岸、仲平遺跡以降の 4 遺跡は大滝根川の支流蛇石川の沿岸に位置している。各集落間の距離は、川に沿って 3km 程度である。いずれも河川近くの段丘面や丘陵尾根線に立地している。

## ①……………時間軸, 土器型式の整理

東北地方南部における縄文時代中期の土器型式は、山内清男による一連の研究により、大木諸型式が設定されていた [山内 1937]。このうち中期後半から末葉については、大木 9 式・10 式が相当する。しかし、大木 9 式と大木 10 式の間には、施文方法などに大きな相違があり、この間を埋める土器型式が求められていた。そこで丹羽茂は、伊東信雄により大木 10 式として認定されていた土器 [伊東 1957] に着目して、山内大木 10 式を大木 10 式新相とし、大木 9 式との間に大木 10 式古相を設定した。いわゆる丹羽編年である [丹羽 1971 など]。丹羽茂が提示した大木 10 式古相の資料は、本宮市荒井上原遺跡<sup>かんぼら</sup>、二本松市塩沢上原遺跡<sup>うわはら</sup>・原瀬上原遺跡<sup>うえはら</sup>など、阿武隈川上流域の資料である。山内清男が型式設定の基準とした仙台湾の大木貝塚の資料とは、地域が異なっている。丹羽の提示した大木 10 式古相資料には、山内の基準資料に類似する土器片もある。図 2 の 60 や 63 である [早瀬・菅野・須藤 2006]。しかしこれらは、大木 9 式とされている土器である。

ところが近年、大規模発掘調査の進展により資料が急増するとともに、山内清男の設定した標準資料に対比することの困難な土器群が知られるようになった [柳沢 1980 など・福島 1987]。また縄文時代後期前半期の東北地方南部を対象にして、馬目順一により関東地方の称名寺式に相当する綱取 I 式、堀之内 1 式に相当する綱取 II 式という土器型式 (図 10) が設定された [馬目 1968]。これについても、土器群の内容や土器型式の平行関係の再検討が求められている [福島県教育委員会 1996・本間 2008 など]。

阿武隈川上流域において、この時期の土器変化を知る上で重要な遺跡は、三春町越田和遺跡の調査成果である。この遺跡では、複式炉の設置された竪穴住居から石囲炉への変化、さらに敷石住居にいたる土器群が、文化層の重複と遺構の重なりで把握されている [福島県教育委員会 1996]。





図 2 山内編年大木 9 式基準資料[早瀬・菅野・須藤 2006]

**越田和1群土器** 複式炉の設けられた竪穴住居跡から出土した。凹線と充填縄文により、アルファベット文様施された土器である。丹羽編年の大木9式新相と10式古相と関連する土器である。大木9式新相では楕円文と逆U字文で縦方向に文様が展開するのに対して、大木10式では横方向のアルファベット文が展開するという特徴が指摘されている〔丹羽1989〕。あるいは体部文様が下端で切れるのを大木10式、切れないのを9式とする鈴鹿良一の区分案がある〔鈴鹿1986〕。しかし鈴鹿の案では施紋技法、器形、土器構成などを合せてみれば、大木9式と10式を区分する基準としては不明瞭である。越田和遺跡1群土器は、以前に筆者がびわ首沢式〔福島1987〕とした土器群のなかで理解できよう。



図3 山内編年大木10式土器〔早瀬・菅野・須藤 2006〕



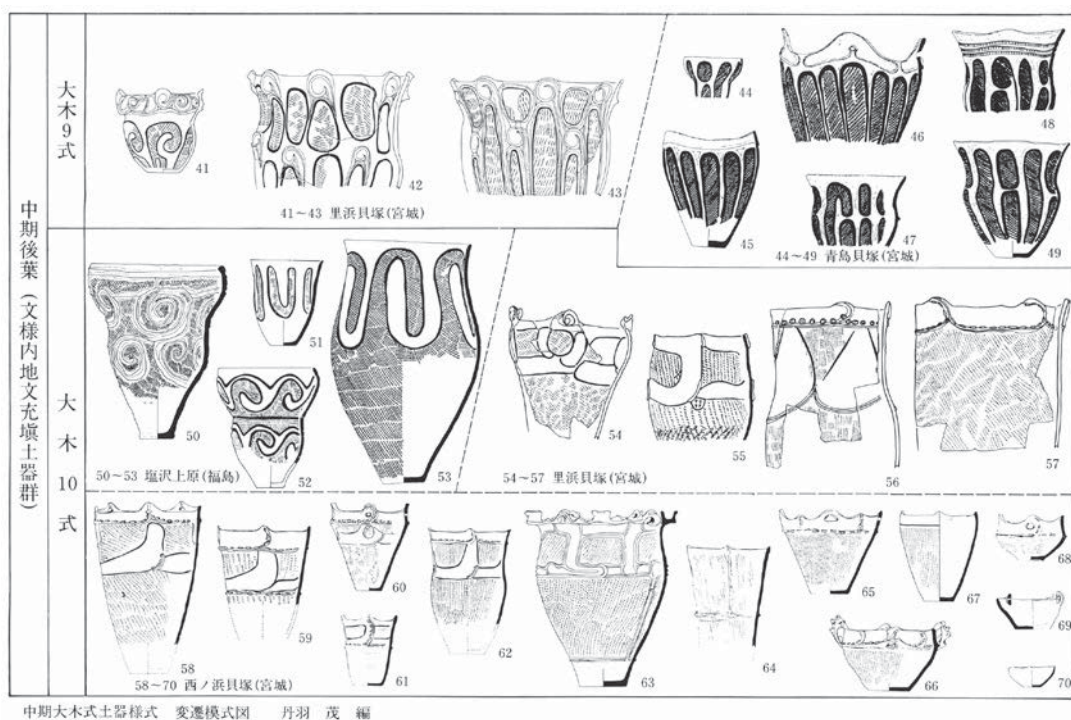


図4 丹羽編年大木9・10式土器[丹羽 1989]

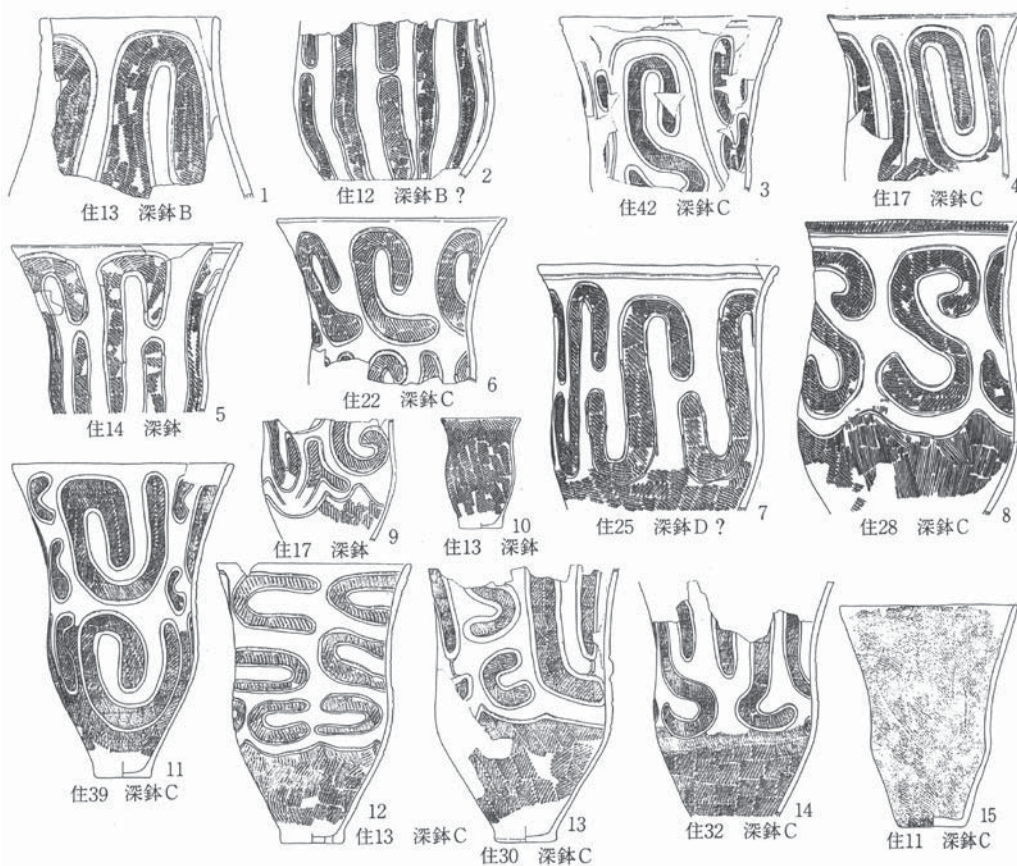


図5 越田和遺跡1群土器(びわ首沢式)[福島県教育委員会 1996]

びわ首沢式には、加曽利E 4式と曾利式土器が客体的にとまなっている。また栃木県槻沢遺跡では28号竪穴住居跡などで、びわ首沢式土器と加曽利E 4式土器が混ざって出土している[栃木県教育委員会 1980]。両型式が平行関係にあった一端を示していよう。

**越田和2群土器** 石囲炉を伴う竪穴住居跡から出土する土器である。沈線が多用され、口縁部は水平であるのに加えて突起や波状となり、体部に沈線による文様が特徴的である。越田和1群土器に、加曽利E 4式の文様要素を合わせて出現した地方色の強い土器である。福島が大木10式新相期には、阿武隈川上流域には別型式が存在しているとし、牛蛭式を提案した土器群に相当する[福島 1987]。また本間宏の綱取式に先行する土器群(図8)に相当する[本間 2008]。

大型の深鉢は、びわ首沢式の形を引き継いで、これに楕円文などを配置した独自の文様が施されている。在地の要素である。これに加曽利E 4式から称名寺式の要素を加えて、それまでの東北地方南部の土器要素が希薄になり、独自の土器型式を生み出したのである。越田和2群の土器は、阿武隈川上流域を主な分布圏とする在地性の強い特徴がある。南方へは、関東平野の北部に限界線が

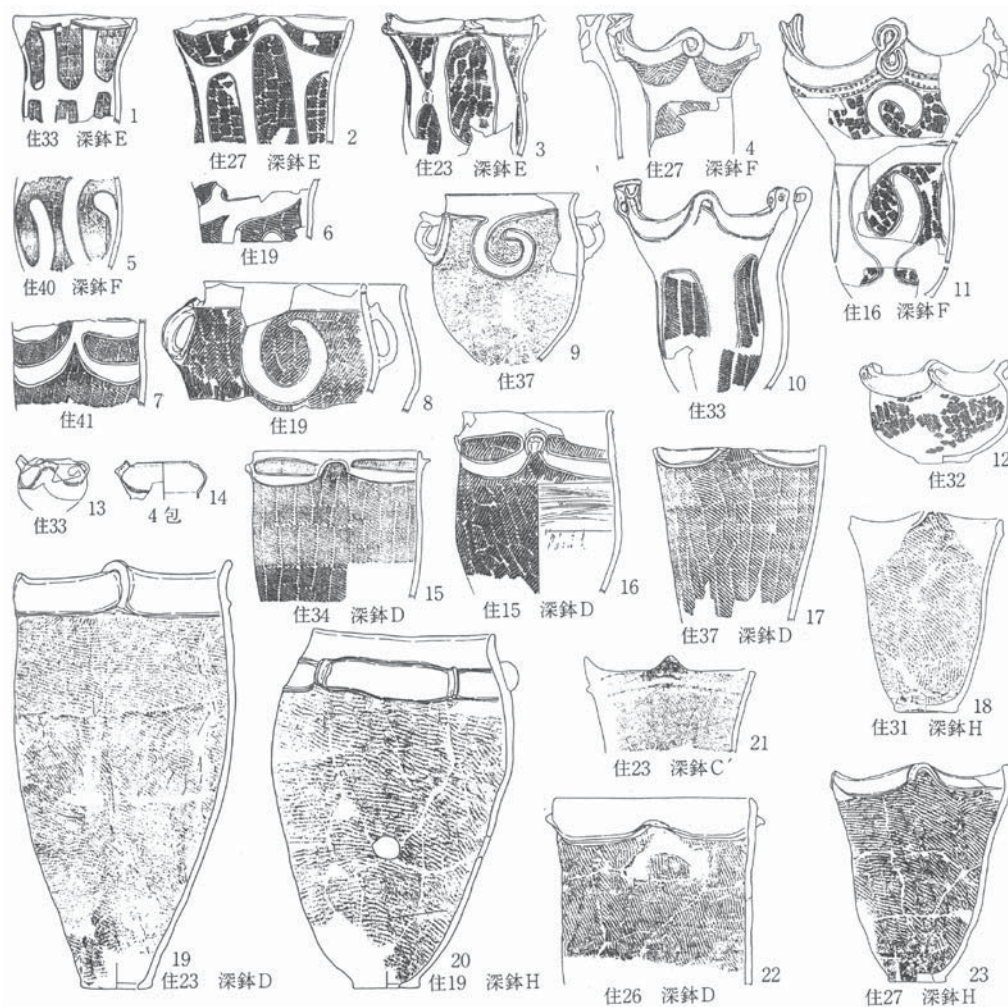


図6 越田和遺跡2群土器(牛蛭式土器)[福島県教育委員会 1996]



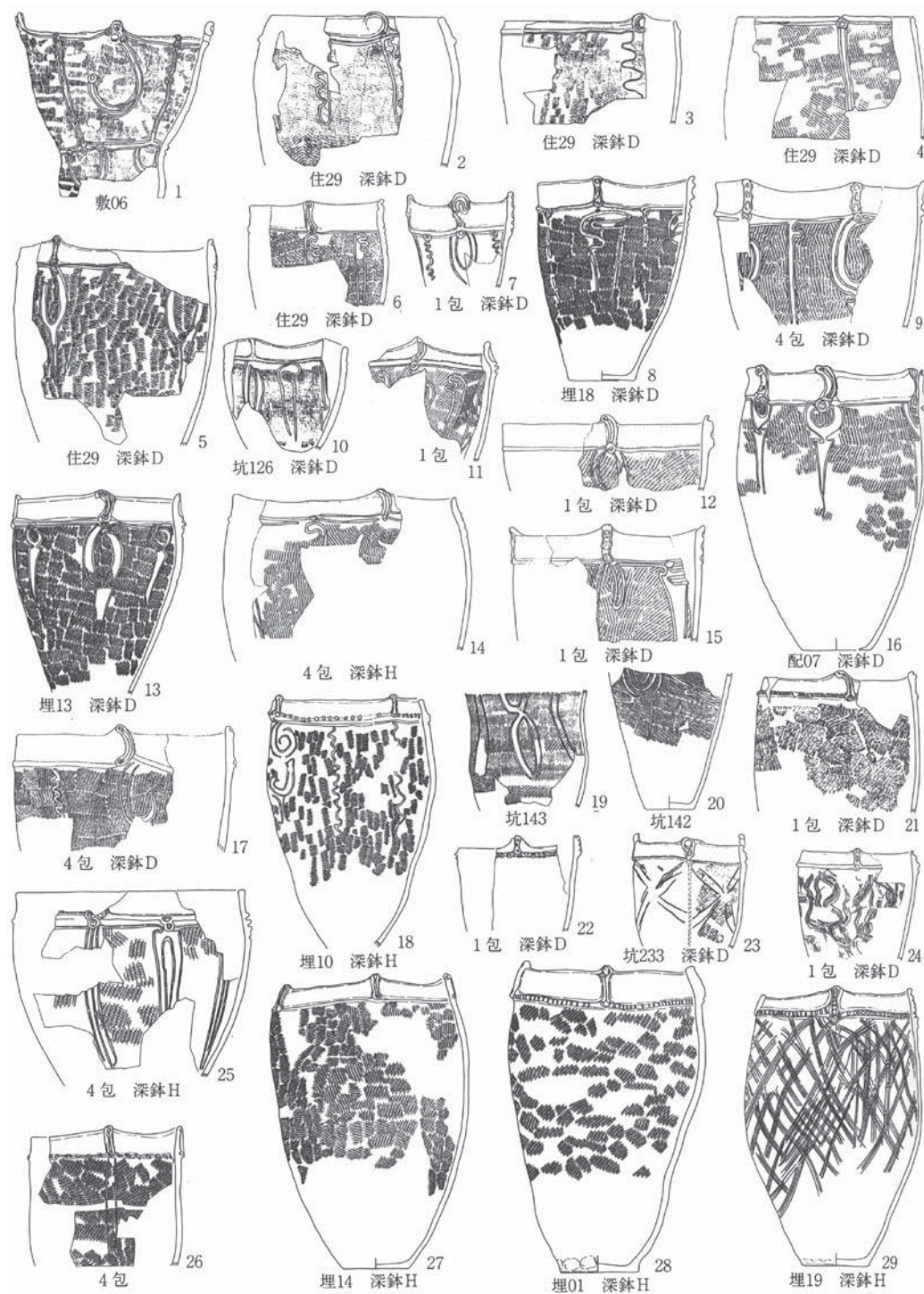
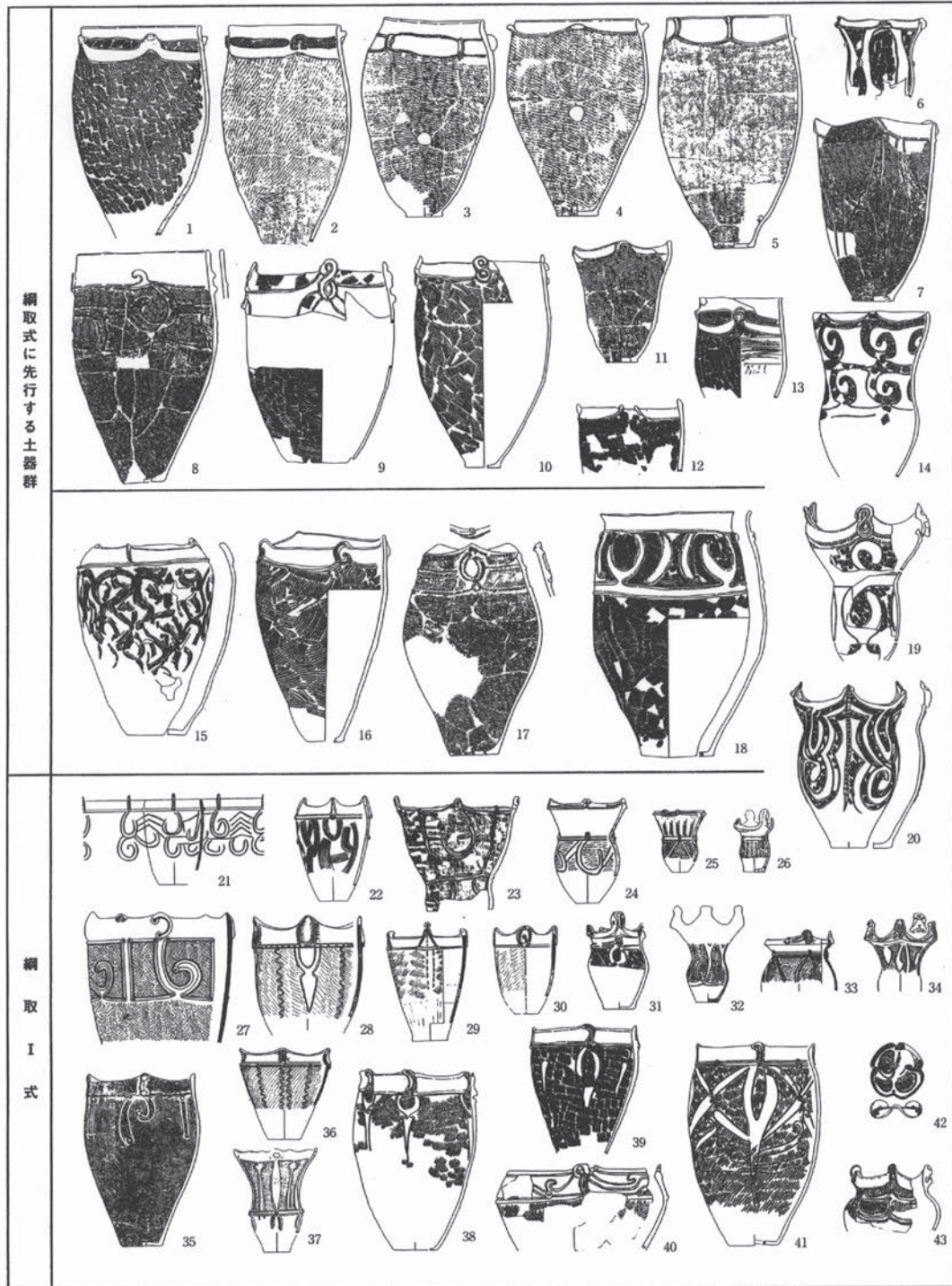


図7 越田和遺跡3群土器(堀之内1式土器)[福島県教育委員会 1996]

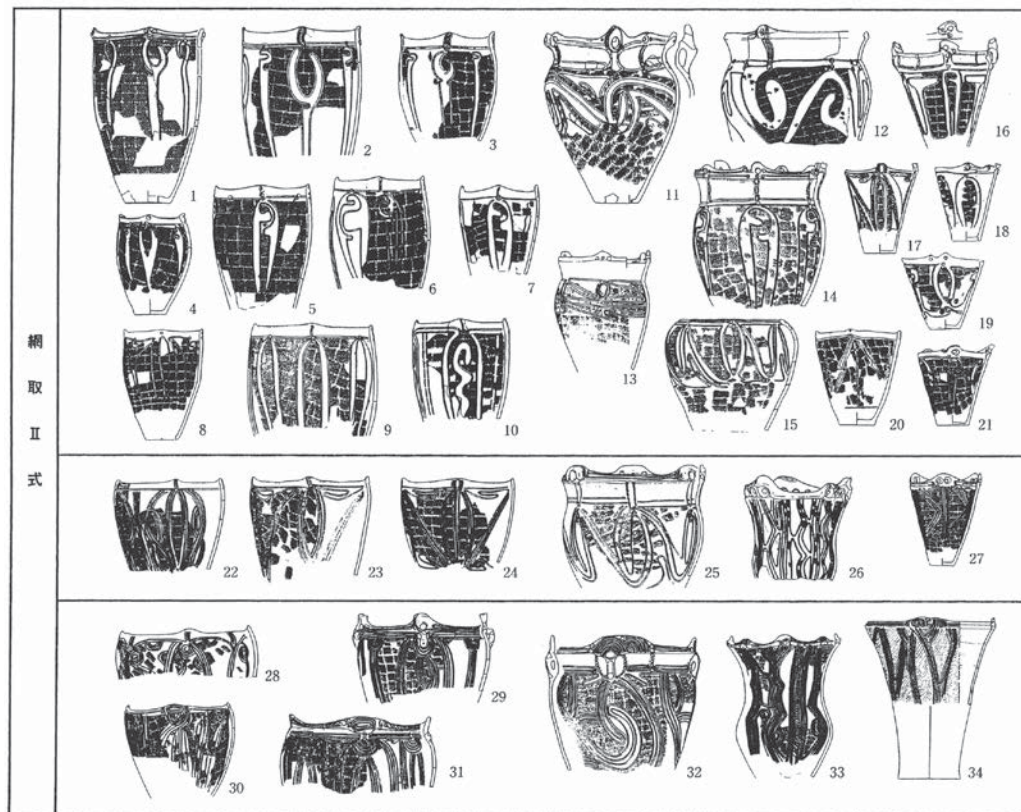




網取式成立期の編年模式図

1～6・9～14・19・23・38～40：越田和（福島） 7・8・17・20・35：高木（福島） 15・16・18：馬場中路（福島） 21・22・24～26・28～30・32～34・36・37・42・43：大畑（福島） 27：網取貝塚C地区（福島） 31：上ノ台A（福島） 41：西原（福島）（縮尺：1/15）

図8 本問編年1 [本問 2008]



網取Ⅱ式編年模式図  
1～10・12～33：二屋敷（宮城） 11：馬場平B（福島） 34：大畑（福島）（縮尺：1/15）

図9 本間編年2

ある。北方の仙台湾岸の大木10式土器とはほぼ平行関係にあるが、文様形態や施文手法が大きく異なっている。越田和2群土器と丹羽編年大木10式新相土器、さらに称名寺式土器とは平行関係にあることになる。この結果は、近年の炭素年代測定による土器型式の年代〔小林2004など〕とも整合する。

馬目順一は、「関東の称名寺式・堀之内1式に対応する土器型式があるはず」として、網取Ⅰ式・Ⅱ式を設定した〔馬目1968〕。しかし馬目が抽出して示した土器型式には、層位的裏づけが乏しい。また分布範囲の検討もなされていない。提示された土器は、東北地方南部から出土した称名寺式土器、堀之内1式土器の一部でしかない。大木10式新相と越田和2群土器（牛蛭式）・称名寺式が、並行する時間関係〔小林2004〕にあれば、馬目順一が称名寺式に対応する土器型式とする網取Ⅰ式が成立する余地はなくなる。

ところが本間宏は、馬目順一の型式名称を尊重して、網取Ⅰ・Ⅱ式の内容を大きく変更する編年案を提示している〔本間2008〕。本間は、網取Ⅰ式の前に、越田和遺跡2群土器に近い土器群を示し、網取Ⅰ式には、馬目の言う網取Ⅱ式と堀之内Ⅰ式に近似した土器群を当てはめている。続けて残余の土器を網取Ⅱ式としている。

したがって、本間と馬目の間では、同じ名称の土器型式でありながら、その内容と枠組みが大きく異なる不都合がある。この場合、網取Ⅰ式に先行するとされた土器の内容が、越田和遺跡2群土



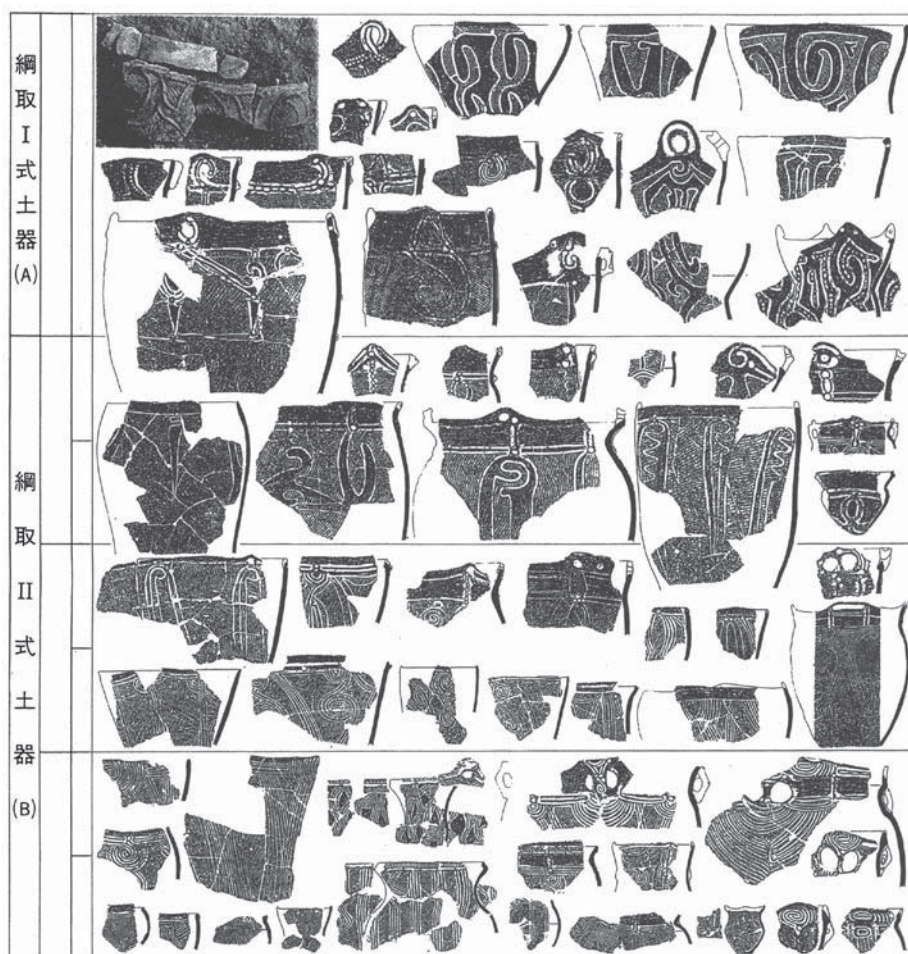


図10 馬目編年(縄文時代後期前半)[馬目 1982]

器と大きく変わらないのであれば、それが牛蛭式と筆者が命名した土器内容、および分布範囲が重なるのであれば、牛蛭式とすべきであろう。また本間の網取Ⅰ式とⅡ式において、深鉢間に型式区分の不明瞭な土器が含まれているのに対して、網取Ⅱ式の新相と古相の間には、文様の施文方法に大きな相違があり、柴原A遺跡などでは層位的にまとまりがある。新相は、いわゆる集合沈線による施文である。

**越田和3群土器** 壁柱構造の竪穴住居跡・敷石住居跡から出土した土器である。関東地方の堀之内Ⅰ式土器のなかでとらえられる土器である。東北地方南部が、関東の土器型式圏と一体化した結果である。ただし、口縁部に凸帯を巡らす大型の深鉢では、特徴的なCやI字形の区画文様が配置されている。前段階の文様要素である。この型式には、新潟方面の三十稲場式が客体的にもなっている。

また柴原A遺跡の平地式敷石住居跡からは、堀之内Ⅰ式新相の集合沈線の多用された土器がともなっている(参照、図18の土器)。この種の土器は、関東地方から東北地方に分布しているとともに堀之内Ⅰ式古相の土器とは文様の施文要素が大きく変化する。同一型式名称の新古で区分するよりは別型式名称で区分すべきであろうが、そのまま堀之内Ⅰ式新相としておく。



図11 相原編年[相原 2005]



近年、相原淳一は、宮城県内の複式炉をともなう竪穴住居を検討するなかで、大木8b式から大木10式までの土器編年表（図11）を提示している〔相原2005〕。そこに示された土器群は、阿武隈川上流域の土器群と共通する部分もあるが、むしろ差異が顕著である。とくに大木9式諸段階と大木10式後半で、装飾文様の相異が著しい。大木10式前半期として提示された土器は、福島県に近接した阿武隈川水系白石川流域の土器である。だからこそ山崎充浩が、丹羽編年の大木9式新相と並行する阿武隈川上流域の土器を春田Ⅱ式として捉え〔山崎1990〕、筆者が別型式として理解すること〔福島1987〕を提案した理由である。

以上から阿武隈川上流域では、縄文時代中期末葉から後期前半にかけて、次の土器型式を考古学上の時間軸としておく。春田Ⅱ式（丹羽編年大木9式新相平行）、びわ首沢式（越田和1群土器大木10式古相平行）、牛蛭式（越田和2群土器大木10式新相と称名寺式平行）、堀之内1式古相（越田和3群土器）、堀之内1式新相である。

近年の炭素年代測定によれば、大木9式から堀之内1式にかけての絶対年代は、次のような測定結果が提出されている。大木9式新段階期がBC2,620-2,490年、あるいはBC2,670-2,470年〔藤根・佐々木2005〕。称名寺式は2,470-2,300cal B C年、堀之内1式は2,290-2,030cal B C年、堀之内2式は2,030-1,870cal B Cである〔小林2006〕。大木9式新相の開始から堀之内1式期の終了までは、最大で600年程度、最小で500年程度の時間幅が想定されている。これを理科学上の時間軸と理解しておく。

## ②……………住居の変化

まず、集落を構成する主要な施設である住居の型式期に対応した変化を確認しておく。この地域では、複式炉をともなう竪穴住居の成立から石囲炉をともなう住居、そして敷石住居の受容、掘立柱建物の出現という順序で、住居が変化する。

**複式炉** 縄文時代中期後葉の東北地方南部において、竪穴住居には「複式炉」という特徴的な施設が設けられていた。炉の名称は、「土器を埋設した火壺と石で構築された炉がセットになったもの」として1960年前後に梅宮茂によって命名された〔梅宮1960〕。この後、丹羽茂が、土器埋設部と石囲部、それに前庭部が組み合わされたものを上

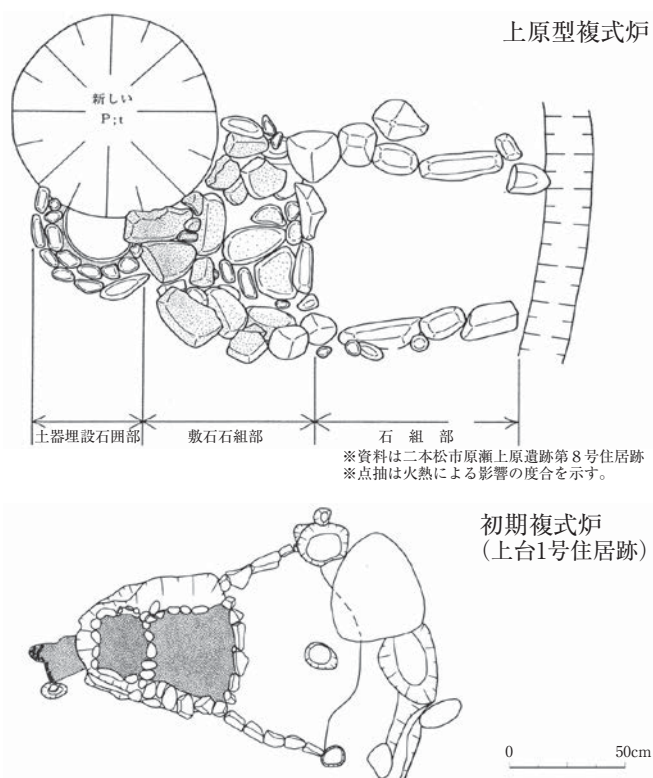


図12 複式炉の2型式〔丹羽1972、荒木1998〕

はら  
原型複式炉として定義をした〔丹羽 1971〕。ここでは、阿武隈川上流域における上原型複式炉の出現から終末に至る竪穴住居を概観しておく。ここで単に複式炉という場合は、上原型複式炉をさしている。

上原型複式炉は、機能が異なる3つの要素で構成されている。土器埋設部と石囲部、それに前庭部である。石囲部において火を焚き、これを前庭部で管理をする。土器埋設部には炭火を保存すると推定されている〔梅宮 1960 など〕。妥当な考えである。

土器埋設部には1個から数個の深鉢が据えられ、これを保護するように、その周囲に円礫が配置されている。土器内部の下部には、炭化物が堆積している。土器体部の外面には、焼土層が形成されている。上半部の焼土層は厚さ数 cm にもなり、硬くなっている。これに対して、下半部の焼土層はあまり発達していない。これは、土器の内部に木灰を入れることにより、炭火の熱が土器の外側に伝導することが阻害された結果であろう。埋設土器の底に炭化物の薄層が形成されているのは、木灰が経年変化で分解して、これに含まれていた炭化物が遺存した結果である。

石囲部は、石組部あるいは敷石部とも呼ばれている。土坑の底面や側壁に石が貼り付けられた造りである。複式炉の石囲部では、縁石は比較的不明瞭である。石囲部の土器埋設部側上半部には、著しい加熱痕跡が残されている。これに対して底面の加熱痕跡はそれほどではない。これも、木灰などを入れて利用したのであろう。木灰によって保護されれば、貼石の表面に加熱が及ぶことは少ない。土器を据えて煮炊きを行うにも、石床ではなく、灰床の方が安定する。石を敷くことにより、土中からの湿気を遮断する効果がある。ただし木灰が少なければ、焚火の影響は貼石にも及ぶ。

前庭部は、石囲部と竪穴の側壁に続く浅い凹面で、いわゆる踏み締まりにより硬化している。初期の形態は、側壁側に大きく開いた台形状である。側壁近くの前庭部からは柱穴状の遺構が検出されることが少なくない。この遺構は、主柱ではなく出入り口の梯子状施設の痕跡であろう。福島県北向遺跡では、この部分に踏み石が据えられていた〔福島県教育委員会 1990〕。押山雄三も、この部分に出入り口を想定している〔押山 1990〕。

土器型式に合わせて、複式炉およびこれに類する施設の変化を追えば、この流れから抜け出すことは難しい。さらに土器編年に対する研究者間の相違があれば、変化の理解にも混乱が生じる。そもそも、土器変化と炉の変化が対応しているとは限らない。土器の変化に合わせるのではなく、まずは遺構自体の変化を知ることであろう。

複式炉を構成する3要素のうち、土器埋設部は大木8b式期に、前庭部については大木9式期の初期段階に出現している。これとともに土器埋設炉、あるいは小型石囲炉が設けられていた。そして大木9式期の新相期に、貼石炉が導入されて上原型複式炉が成立した。貼石は、複式炉を構成する重要なポイントである。

大木8b式期において、長方形の石囲炉は、関東地方北部や新潟県方面から東北地方にかけて広く分布している。長方形の軸線は、竪穴の形状、主柱配置に対応している。このなかには、石囲の内部に石を敷く例もあるが、一般化はしていない。土器が埋設される地域は、信濃川流域で顕著である。ここでは、石囲炉の片方に寄せて土器が埋設されている。また、小さな石囲炉を敷設する炉が大木8b式並行期に出現している。さらに土器の埋設された反対側の短辺が大きく開く形態にもなっている。土器が埋設される要素に着目すれば、信濃川流域は土器の埋設された石囲炉を造る生



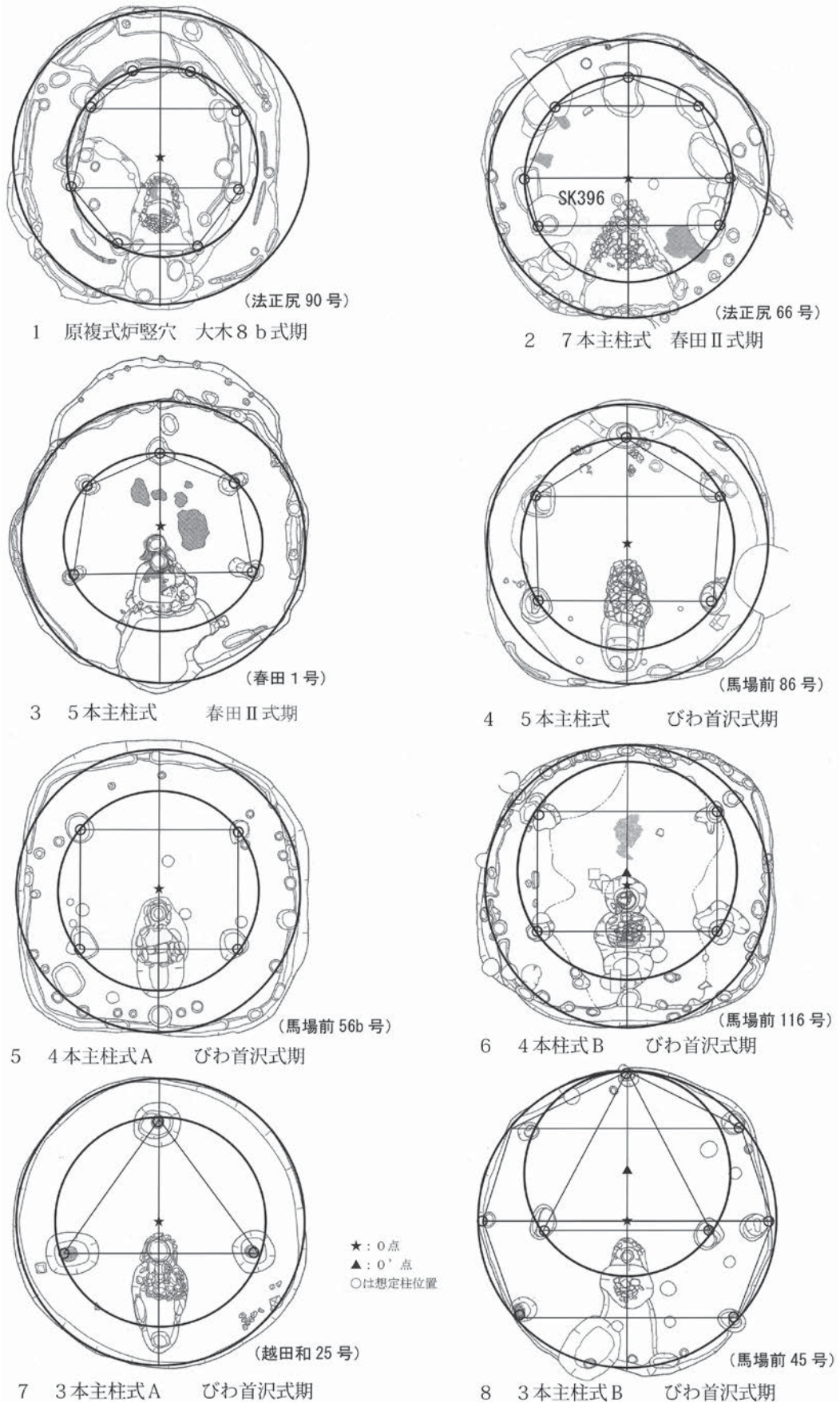


図13 複式炉竪穴住居跡平面企画変化[福島 2005]

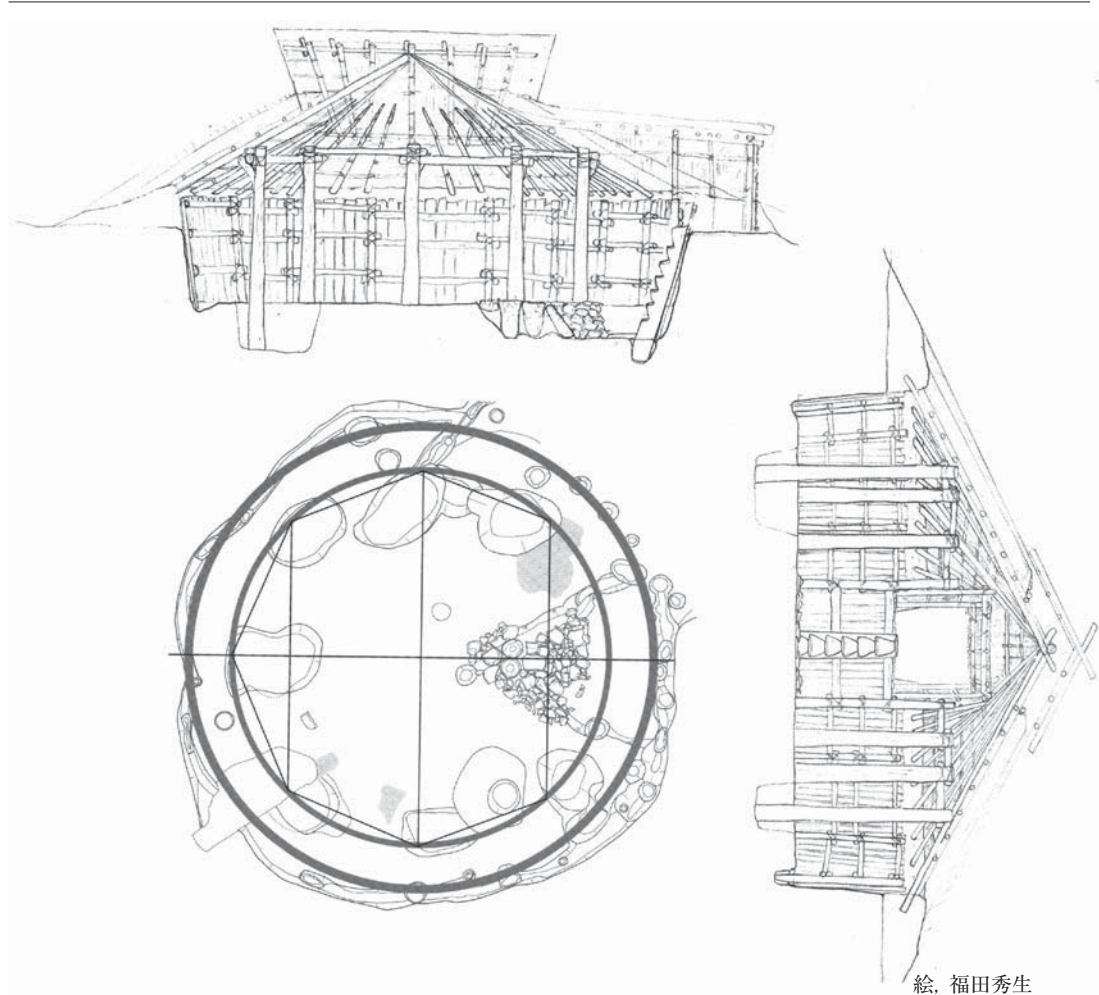


図14 磐梯町法正尻遺跡66号竪穴住居跡復元案〔福島 2005〕

活様式が定着した場所といえよう。ただしこの地域では、掘り込みのある前庭部は確認されていない。

石囲炉に連結された前庭部は、大木8b式土器の分布圏のなか出現する。また土器の炉内埋設も確認されているが、この部分は発展することなく、一時期途絶えてしまう。このことは、複式炉の重要な構成要素である。土器の埋設が、大木式土器圏の自立的な発展のなかで生み出されたのではないことを示している。

大木9式の前半期になると、東北地方南部では、ふたつ石囲炉連続して設けられ、これに前庭部が伴う炉が出現する。馬目順一が着目した上田郷型複式炉である〔馬目1991〕。この石囲炉の底面には、貼石がない特徴がある。磐梯町・猪苗代町法正尻遺跡90号竪穴住居跡や飯野町（現福島市）上台1号竪穴住居跡である。この炉は、短期間に上原型複式炉に変化したと推定され、検出例は少ない。炭火を保つための石囲炉があり、焚き火用の石囲部、管理用の前庭部を完備している。この頃から、石囲炉に土器が付設された例も散見する。上原型複式炉が出現する直前である。荒木隆は、この炉を初期複式炉〔荒木1998〕と理解している。確かにこの炉は複式炉の祖型のひとつであるが、



土器埋設炉が必ずともなう上原型複式炉とは区別しておく。前庭部付石囲炉の一種である。

この炉と関連して中村良幸は、広義の複式炉の要素として前底部の存在を重視し、これがあれば広義の複式炉に含めることを提案している〔中村 1982〕。石囲炉と前庭部からなる沢部型複式炉〔市川 1978〕は岩手県や秋田県などに特徴的な炉である。この地域では、縄文時代後期前半まで沢部型複式炉が継続している。須藤隆も同様の観点から複式炉を分析している〔須藤 1985〕。宮城県上深沢遺跡の炉などである。

しかし上原型複式炉が土器埋設部、敷石部、前庭部が整って成立するのであれば、上田郷型や沢部型複式炉とは、別型式の炉と理解すべきであろう。石囲部に貼石が施され、土器埋設炉がともなう典型的な上原型複式炉は、通常、大木9式の後半期とされる頃、春田Ⅱ式と前後して出現する。土器埋設の伝統は、信濃川流域で顕著な特徴である。東北地方南部では、土器埋設が断絶しているので、この地域と結びついて導入されたと考えられる。春田Ⅱ式の前半では、曽利式に関連する土器が客体的に含まれている（高木遺跡 251 号住居跡など）。上原型複式炉は、石囲炉という東日本の伝統を発展させ、信濃川流域の土器埋設施設、東北地方南部の前庭部、それに貼石という新しい工夫をあわせて生み出されたのである。

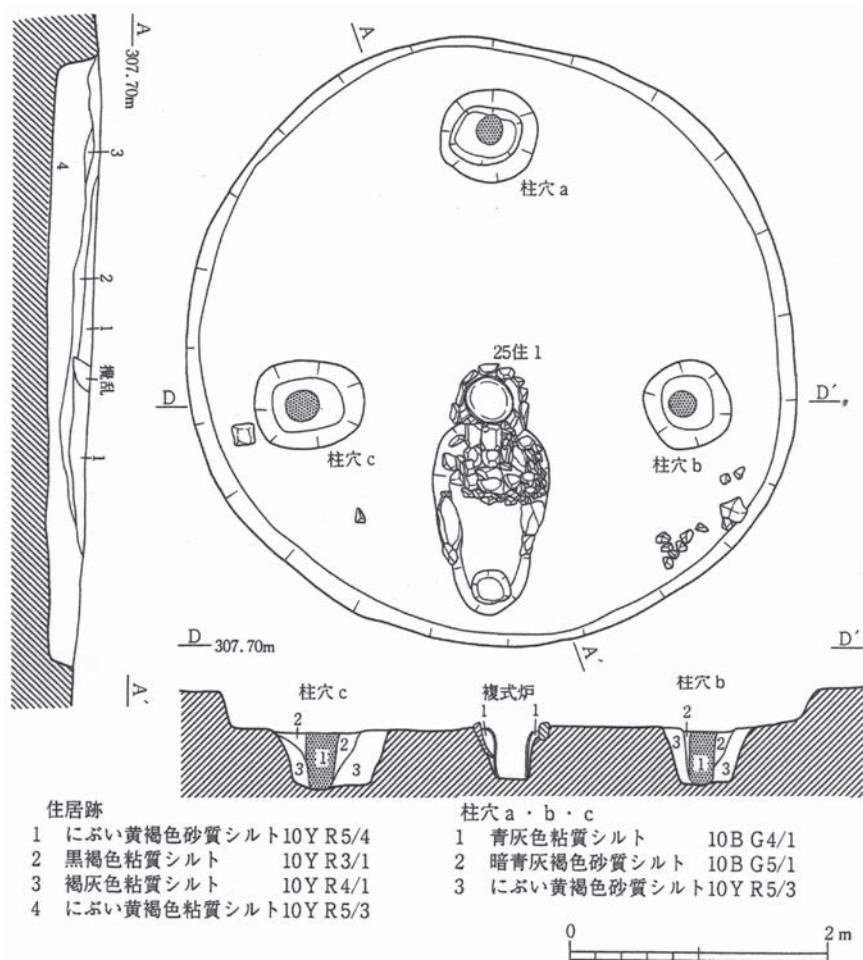


図15 竪穴住居跡（びわ首沢式期） 越田和遺跡25号竪穴住居跡〔福島県教育委員会 1996〕

上原型複式炉の分布範囲は、阿武隈川上流域を中心に、阿賀川流域、栃木県北部、最上川上流域に分布している。しかも、これと重なるようにびわ首沢式も分布している。仙台湾沿岸では、びわ首沢式期に一部で上原型複式炉がみられるが、全般に分布は希薄である。東北地方中部以北は、沢部型複式炉の分布圏である。また、いわき市方面の海岸部や久慈川下流域でも、複式炉をともなう堅穴住居の分布は希薄になる。やはりびわ首沢式土器も客体的である。

びわ首沢式期の複式炉をともなう堅穴住居は、整った築造企画のもとに作られていることが、橋本幸夫によって明らかにされている〔橋本1998〕。複式炉と柱穴の関係、堅穴掘形が相互に関連した築造企画が想定されている。筆者も複式炉の築造について考えてみたが、橋本の理解と基本的な点で一致している〔福島2005〕。

縄文時代中期後半の住居変化を図13に示した。春田Ⅱ式における8本柱堅穴が、次第に主柱を減らして最終的に3本柱となること。前半段階では、複式炉の土器埋設部が堅穴外形線の中心であり、主柱列の中心であった。新しくなるにしたがい、堅穴外形線と主柱列の中心が分離して、複式炉の主軸線上を移動する。また古い段階は、複式炉の全長が堅穴外形の半径値とほぼ同じ長さであった。しかし新しくなると、複式炉の規模は小さくなる。堅穴住居と炉の関係が、それまでのような結び付きを失った結果であろう。主柱配置を考える場合、前庭部に設けられた柱穴が問題となる。これを主柱と理解する〔福島県立博物館1985〕案と出入口の踏み台やはしご穴とするのであれば、堅穴住居の築造企画が大きく異なるからである。

初期の上原型複式炉では、土器埋設部を起点に堅穴住居の側壁に向かって、石組部・前庭部が開く形である。全体の形状は扇形である。これは新しくなるにしたがい、石囲部・前庭部の幅が狭くなる傾向がある。これとともに石囲部では使用される石材が大きくなり、貼石よりは組石の手法が多用されるようになる。

上原型複式炉をともなう堅穴住居跡は、比較的深く掘り下げた床を造っている。越田和遺跡では、後続する時期の堅穴住居跡と比べて、深い例が大半であった。この時期の堅穴では、仲平遺跡3次3号堅穴住居跡のように、検出面から床面までが1.6mを測る壁が遺存した例もある。また堅穴住居跡の堆積土に分厚い焼土層が形成されていることもある。この土層は火災により形成された焼土層ではなく、土屋根材に焼土を利用した可能性を考えている。深い堅穴に土屋根という閉鎖的な住居構造と推定されよう〔福島2005〕。

上原型複式炉の最終形態は、前庭部が消えて土器埋設部と石敷部で構成される達磨形となる。これとともに石敷部の底面に底石が敷かれない例も多くなる。全体の造りも粗雑になる。主柱の配置も、以前のような規則性は見られない。たとえば船引町（現田村市）堂平遺跡4号堅穴住居跡などである〔船引町教育委員会1990〕。この複式炉跡からは、牛蛭式の深鉢が出土している。過渡期の資料である。

**石囲炉** 阿武隈川上流域では、牛蛭式（越田和2群土器）の出現と前後する頃、埋設土器をともなう方形石囲炉が主流となる。平石ないし直方体の転石4個を方形に組み合わせた構造である。転石は、長側面を上にして据えられ、掘形は石材の形状に合わせて造られている。炉床は浅い凹地である。このなかに、土器が正位ないし斜めに据えられている。土器はそのまま置かれていることもあるが、通常は掘形の中に下半部が埋められている。なかには床の一方に寄せて、あるいは真ん中



に据えられている。あるいは、石囲炉の外側に近接して土器が埋設されている例もある。炉の内部は、著しい熱変化が認められ、床面は焼土面となっている。

越田和遺跡で確認された牛蛭式期の竪穴住居跡は、円形掘形、4本主柱で、石囲炉は、主柱列を結ぶ南梁線寄の位置に片寄って造られている。埋設土器をとまなうことは、前段階の伝統を受け継いだ造作である。主柱構造の上屋、炉が床面の梁筋下に造られることも同様である。住居の出入り口は、石囲炉のある側と推定され、これと関連する柱穴がある。複式炉をとまなう竪穴住居と比べて、顕著な特徴であろう。さらに一部では、柄鏡形につながる突出部の痕跡も確認している（越田和遺跡19号住居跡など）。

この種の竪穴住居と共通する構造は、茨城県や栃木県方面に類例がある。日立市上の内遺跡や同市下の内遺跡、栃木県槻沢遺跡など、いずれも加曽利E式後半期の遺跡である。後藤信裕は、複式炉の掘形に着目して関東北部と東北南部の相違について分析を加えている〔後藤2010〕。東北南部では土器埋設部と石囲部の掘形が別々に造られるのに対して、関東北部の複式炉は土器埋設部と石囲炉を一体として掘形が造られる傾向にあることを指摘している。そして石囲部に土器が埋設された炉が加曽利E4式期に出現していることを示している。この種の炉は、4本主柱で、竪穴住居の一方に偏って配置され、反対側の柱間に石囲炉が配置される形状である。栃木県室ノ木A遺跡2号住居跡〔南那須町教育委員会1993〕である。これは越田和遺跡の牛蛭式期竪穴状住居跡と共通する特徴である。

このほか上の内遺跡2号竪穴住居跡も、四本主柱で方形石囲炉が主柱を結ぶ直線の下に造られている。基本構造は共通している。牛蛭式土器は、茨城県方面からも出土している。北関東地域との交流のなかで、新しい構造の竪穴住居が出現したのである。

越田和遺跡で検出した牛蛭式期の竪穴住居跡では、側壁が高く遺存する例は少ない。この竪穴住居では、従来のものと比べて竪穴の掘形が浅くなる傾向がある。越田和遺跡は、丘陵崩壊土に集落の表土が覆われていたことから竪穴住居跡の検出面は、旧表土の高さに大きな相違はなかったと推定される。配石遺構の検出面と同じ面であることも、これを裏付けている。平地式のような壁が設けられていた可能性もある。主柱に加えて壁柱も、それと同程度の大きさになることも、壁の強化を図る構造を示している。

一方、仙台湾を中心とする大木10式新相の土器が分布する地域では、沢部型複式炉から継続した構造の炉が造られている。この種の複式炉では土器の斜位埋設が特徴的で、典型的な上原型とは異なる。また、石囲部において底面の貼石が失われるとともに前庭部との一体化が進行する。仙台市山田上ノ台14号や仙台市観音堂3号竪穴住居跡などである。この傾向は、山形県方面でも確認されている。真室川町釜淵C遺跡の例である。福島県内でも北端部では、この段階まで複式炉が確認されている。飯館村上ノ台A遺跡22号竪穴住居跡の例などでは、前庭部が失われている。同様に新潟県方面でも、前庭部が消失している。

堀之内1式期の竪穴住居では、4本主柱ではなく、壁際に7本前後の柱が配置されるようになる。壁溝と重なる位置である。主柱構造から壁建構造への継続的な変化である。石囲炉は、床面の中央付近に設けられる。越田和遺跡29号住居跡である。このほか、柴原A遺跡10・11号住居跡でも同様な竪穴住居跡が確認されているが、ここからは時期を限定する土器は出土していない。壁柱穴構

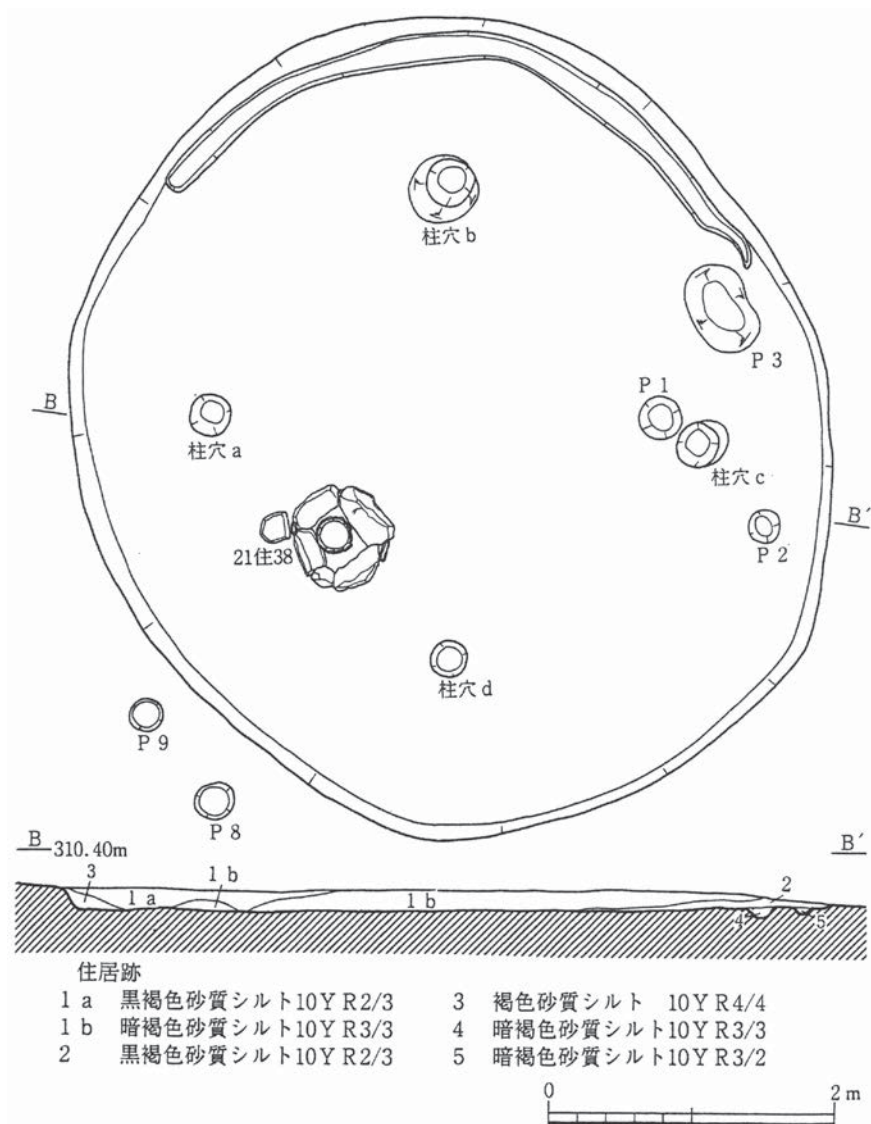


図16 竪穴住居跡(牛蛭式期) 越田和遺跡21号竪穴住居跡[福島県教育委員会 1996]

造で床面中央に石囲炉の設けられた竪穴住居は、縄文時代後期後半から晩期に続いているし、他地域では別の時期にもある。

**敷石住居** 加曽利E4式期の関東地方では、柄鏡形住居が普及する。これに敷石もともなう例が増加する。壁溝が設けられ、主柱に代わり壁柱構造の上屋となる。この住居の石囲炉は、床面の中央に造られる。関東地方の石敷住居は、石材の豊富な西部に分布し、千葉県など石材の乏しい地域には分布しない。石敷きの有無を別にすれば、竪穴の中央に炉を設け、壁柱構造の竪穴住居が一般化する。これに柄鏡の柄状の出入り口が設けられた形態である。

びわ首沢式期から、複式炉の設けられた竪穴住居の床面に石を敷くことが一部で採用される〔鈴木鹿 1986 など〕。この場合、床面に平石が敷かれ、壁面に立てかけられることもある。福島市入りトンキヤ遺跡2a号竪穴住居跡や飯館村宮内A遺跡1号竪穴住居跡などである。ただしこの段階で



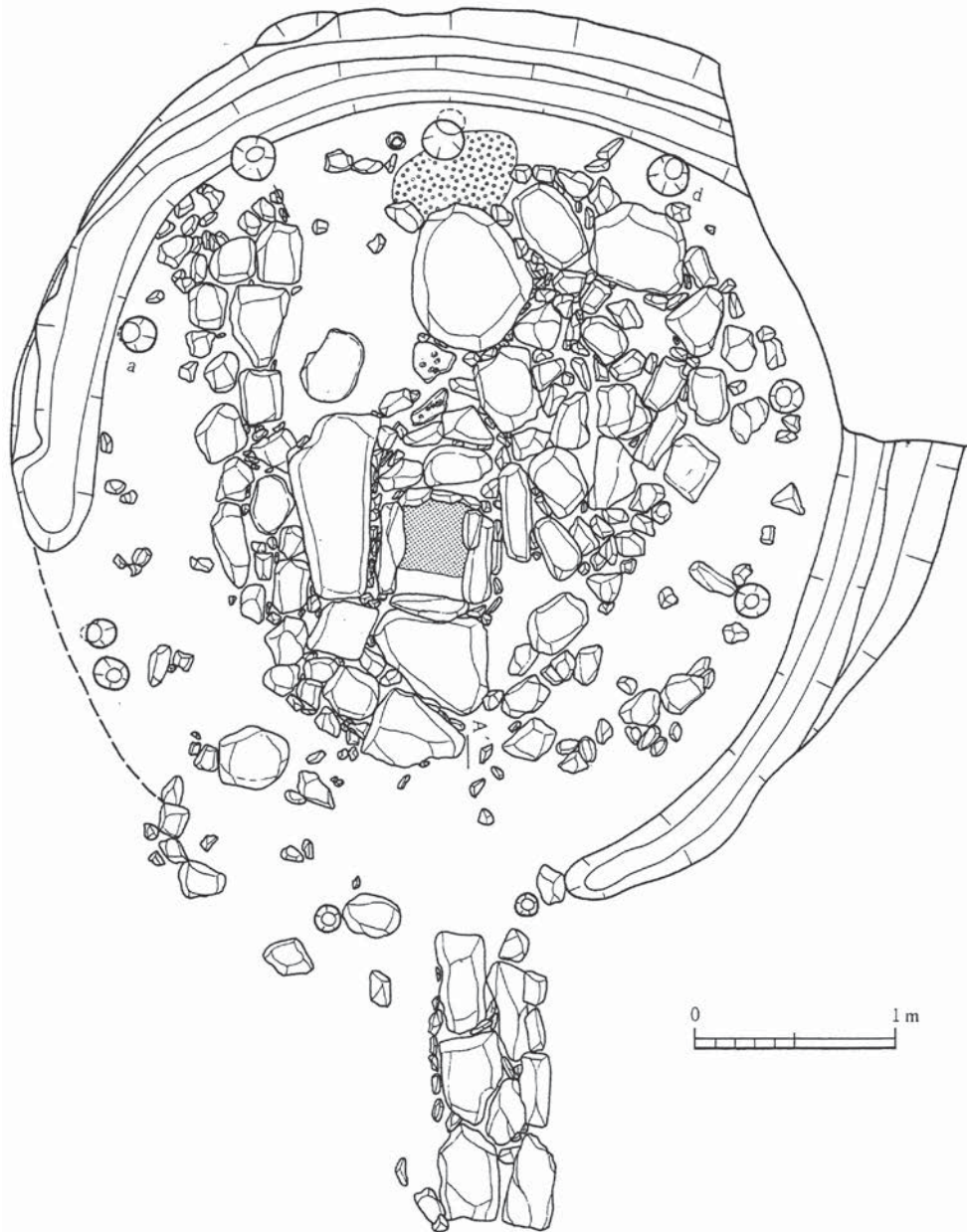


図17 柄鏡形敷石住居跡 越田和遺跡5号敷石住居跡[福島県教育委員会 1996]

は、柱配置などの基本構造は、他の竪穴住居と変わりはない。この時期では、集落のなかに占める敷石住居の割合は極めて少ない。

この時期の敷石住居は、阿武隈川でも中流域、あるいは福島県北部から宮城県南部の地域でまとまる傾向がある。阿武隈川上流域や那珂川上流域では、分布は希薄である。中部・関東地方とは出現時期は近いが、分布圏が異なることから、この地域とは別に、出現したと推定されている〔鈴鹿1986〕。

しかし、長野県幅田遺跡からは、敷石住居跡にともなって東北地方南部に特徴的な土器が多数出

土している [森嶋 1982]。器形は体部上半が膨らむ波状口縁、あるいは幅広凹線と充填縄文を組み合わせた文様構成など、びわ首沢式土器と近似した特徴をもっている。一方阿武隈流域でも、曾利式土器が作られていることが指摘されている [小暮 2002]。小暮は東京湾沿岸を介した曾利式土器の波及を推定しているが、幅田遺跡の例からすれば、中部高地から山岳地をへて阿武隈川流域と結ぶ交流路を想定することも可能であろう。このことから、敷石住居という特異な住居が両地域で前後して出現することは、無関係とすることは出来ないのではないだろうか。

牛蛭式期になると、集落を構成する住居に敷石住居の割合が増加する。郡山市倉屋敷遺跡では、この時期の 4 軒中 3 軒が敷石住居であった。本宮市高木遺跡 225 号竪穴住居跡でも、同様な敷石住居が検出されている [福島県教育委員会 2003]。ただし後の柄鏡形となる突出部は不明瞭である。住居構造や形態は、同時期の竪穴住居と大きな相違はない。

堀之内 1 式期古相期には、突出部が明確な柄鏡形の敷石住居が出現する。石囲炉は方形で、床の全面が石敷きになり、直線的な突出部にも石が敷かれる。越田和遺跡 5 号敷石住居跡である。床面に石が敷かれて、柱穴は、敷石の縁と壁溝の内側に配置されていたらしい。少なくとも、土中に埋めた支柱を支えとする屋根構造ではなかったと考えられる。

続く越田和遺跡の 1 号・2 号敷石住居跡は、平地式である。遺存状況が良好ではないことから不明瞭であるが、時期は堀之内 1 式古相の新しい段階であろうか。この遺跡では新相の土器は出土していない。さらに堀之内 1 式新相期では、突出部が大きく発達した平地式の敷石住居が明確になる。石囲炉を設けた円形部や方形部、そしてこれと同規模に造られた方形の突出部という形態である。この両者を結ぶ部分に狭い通路状の敷石が設けられる。柴原 A 遺跡の例である。

それまでの住居とは、大きく異なる形態であることから、宗教的な施設とする見解も払拭されていない [仲田茂司 1992・三春町 1989 など]。確かに特異な形態ではあるが、前段階の住居から変化した施設であることから、通常の住居であると考えべきであろう [山本 1980]。前方部の側端は石列で区画のある例や前端に台石の配置された例もある。住居の前庭部を構成する施設である。東北地方南部における構造変化である。阿武隈川上流域では、三春町西方前遺跡や本宮市高木遺跡、中流域では福島市宮畑遺跡など、後期前半の遺跡で多数の検出例がある。

本宮市高木遺跡では、石囲炉のある敷石部に沿って竪穴の痕跡を確認されているという報告がある [福島県教育委員会 2003]。しかし柴原 A 遺跡では、敷石住居跡の検出の状況や周辺遺構との関連から見て、明確に平地式建物である。竪穴式ではない。石囲炉の設けられた円形部の周辺調査によって柱穴も確認しているが、これが敷石住居跡の柱穴となる決め手は得ていない。

柴原 A 遺跡で最も遺存状況の良好な 2 号敷石住居跡では、石囲炉の設けられた円形部と石敷に縁石を巡らせた方形部、これを繋ぐ接続部で構成されていた。接続部の脇には開口して土器が埋設されていた。図 18 の土器は、連結部の東に据えられていた。堀之内 1 式新相の土器である。石囲炉の設けられた円形部が居住空間である。敷石の外側に側柱構造で、屋根が設けられていたと考えられる。円形部の面積は通常の竪穴住居の直径と同じである。居住者の数も同様であろう。

方形部には縁石があり、先端に平たい台石も設置されていることから、この部分は露出して屋根がなかったと考えられよう。広場に向かって造られた大きな縁石のような施設である。野外作業やコミュニケーションの場などである。



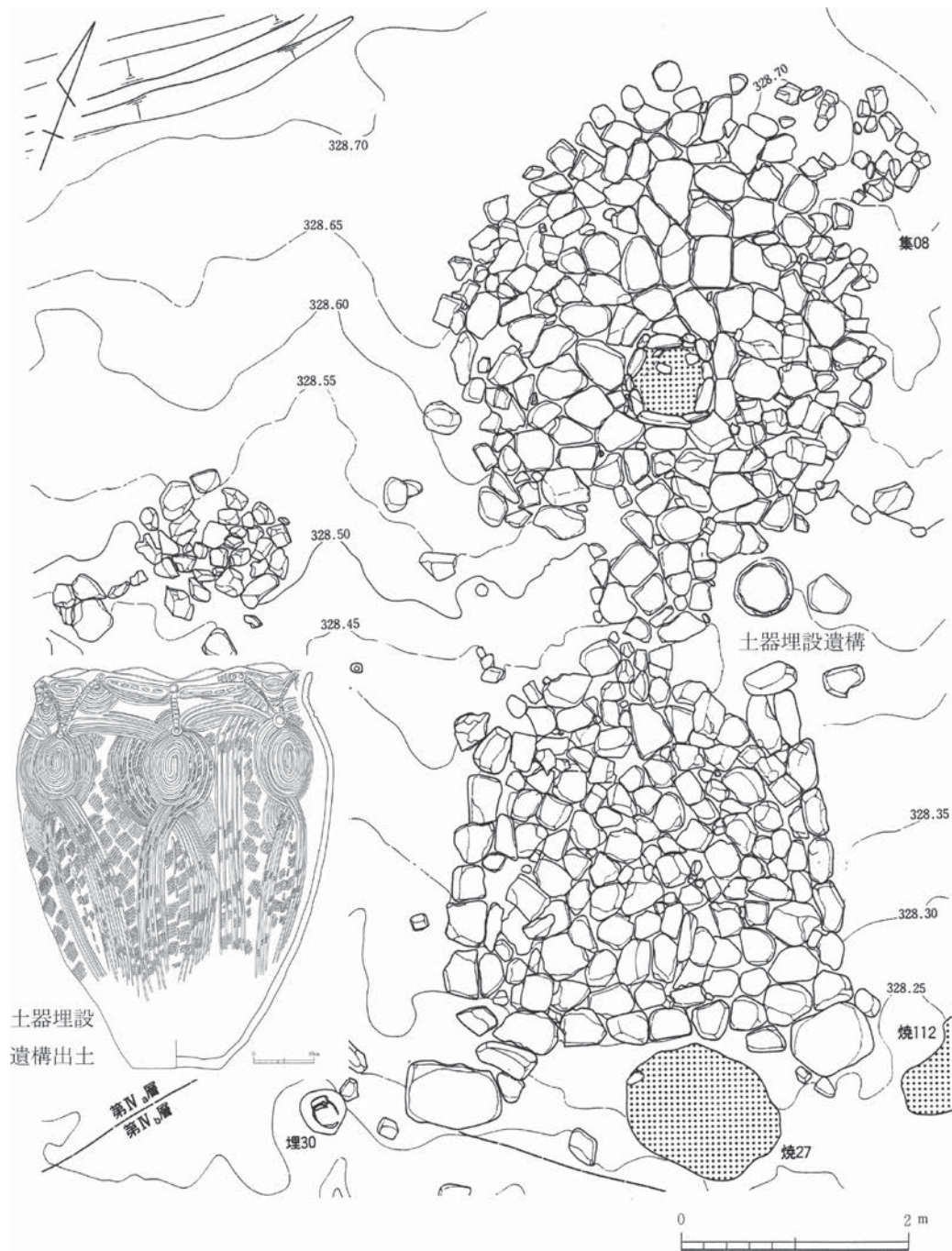


図18 敷石住居(平地式) 柴原A遺跡2号敷石住居跡[福島県教育委員会 1989]

敷石住居は中期後半の関東地方西南部から中部山岳地域を故郷として出現した〔山本 2002 など〕。その後、加曽利 E 4 式期には関東地方の西半部にまで分布圏を拡大し、後期前半には東北地方南部にも普及した〔山本 1980〕。びわ首沢式期には、一部で敷石住居が出現しているが、これは客体的であった。複式炉の周辺の敷石や、壁際に板石が巡らされているが、集落の堅穴のなでは客体的である。阿武隈川上流域に普及する平地式敷石住居は、関東方面から伝来した住居様式である。在地

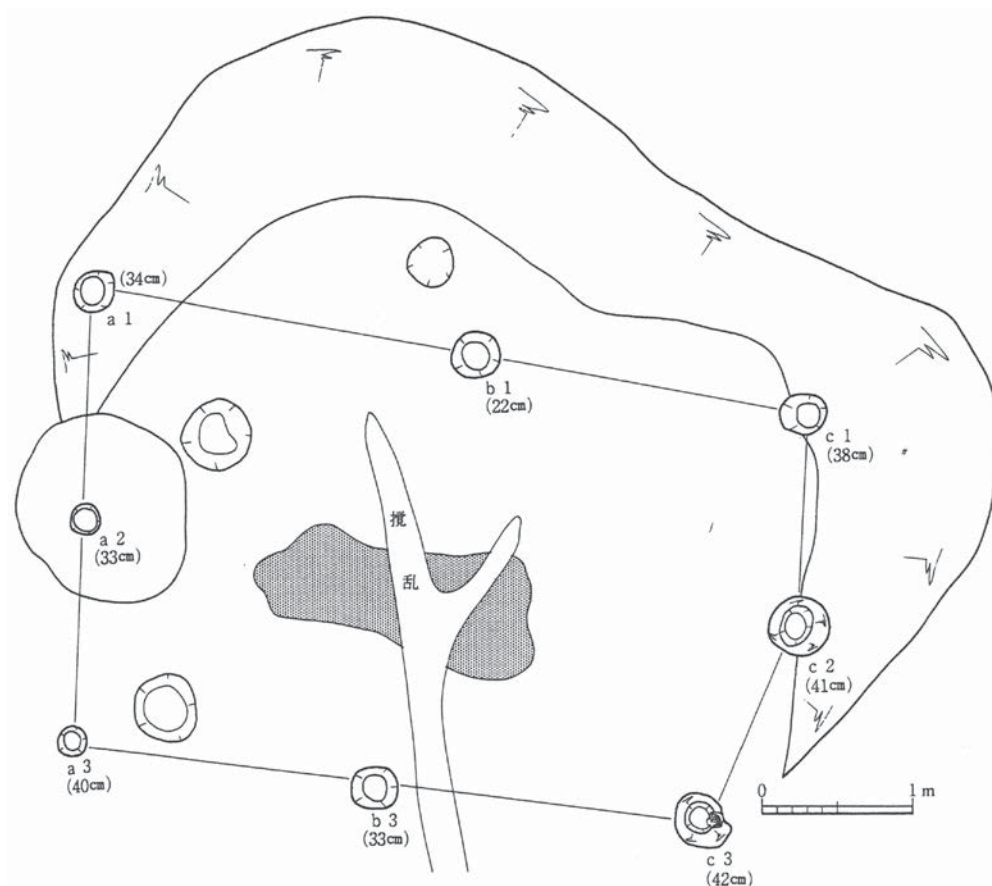


図19 掘立柱建物跡(堀之内1式期) 越田和遺跡1号建物跡[福島県教育委員会 1996]

の要素は希薄である。

**掘立柱建物** 三春ダム周辺においても、掘立柱建物は縄文時代前期には出現していた[福島県教育委員会 1996]。しかし、それが普及するのは縄文時代中期後半からである。飯野町(現福島市)和台遺跡では、縄文時代中期後半に、集落の中心となる広場のなかに掘立柱建物跡が造られていた[飯野町教育委員会 2003]。阿武隈川上流域の掘立柱建物は、堀之内1式期から顕著になる。

三春ダム関連の遺跡調査では、越田和遺跡で5棟の掘立柱建物跡を検出している。これ以外に柱穴も多数検出している。柱穴を結ぶ直線が長方形となる桁行1間、梁行1間の建物跡が3棟、桁行2間梁行1間が1棟、桁行2間梁行1間で梁行側に棟持柱に相当する柱穴がある長方形の建物1棟である。柱穴は円柱形で、おおよそ直径0.3～0.4 m、深さ0.2～0.5 m程度である。

桁行2間梁行2間の1号掘立柱建物跡では、床面中央に細長く、長さ2 m、幅1 mの不正形の焼土面がある。六角形柱配置の5号掘立柱建物跡では床面に焼土面が2箇所あり、桁行1間梁行1間の6号建物跡でも中央に楕円形の焼土面があった。焼土面は、硬く焼けしまった状態である。1号掘立柱建物跡では、厚さ4 cmまで硬化していた。住居として使用された痕跡である。

1号掘立柱建物跡は、33号竪穴住居跡の上に造られていることから、住居施設の継続の可能性が高い。焼土面が楕円形基調で規模も大きい焼土面である。炭火や焚き火により形成された焼土面で



あろう。掘立柱建物の出現は、堅穴が壁柱構造に変化すること、平地式の敷石住居の出現と対応する動きである。発掘調査において確認した掘立柱建物跡は5棟であったが、周辺には柱穴と推定される穴が集中していた。報告された以外にも、掘立柱建物の存在を想定しなければならない。

**堅穴住居等の居住者とその関係** 集落を構成する各施設の核となるのは、住居である。そこに住んだ人、人々が集落を構成する単位となる。ところが堅穴住居等の居住者数、居住者間の関係については不確定な部分が少なくない。居住者数については、いわゆる関野の定理が目安となっている[関野 1938]。関野の研究以降も、堅穴住居の居住者数と居住者の関係についての究明が継続されている。堅穴住居について、これが遺構として認識され始めた関野克の時代と現代では、資料の蓄積に格段相違がある。床面の利用状況、炉以外に焼土面や踏み締まり範囲、支柱、側壁、出入口があり、屋根の傾斜などの諸条件を考慮した分析が加えられている。しかし、居住者数とその結びつきや関係については、確定した成論が得られていない[小林 2004 など]。

有名な姥山貝遺跡B 9号堅穴状住居跡から出土した成人男女各2体、幼児1体の人骨についても、分析方法と視点の相違から見解の一致はない。そもそも堅穴住居跡から人骨が出土したとしても、これを堅穴住居の居住者とする証拠とはならない。さらに複数の人骨遺体があれば、その社会関係を解明することは容易ではない。

ひとつの堅穴住居には、一組の家族が必ずしも居住したわけではない。そもそも、縄文時代の家族を現在の家族という概念で把握することはできない。はたして、縄文時代に家族という概念があったかどうか不明である。堅穴住居跡がいくつか集まっている場合、この堅穴住居群に居住した人々の結びつき関係が問われよう。

堅穴住居跡は、その規模と各種施設から住居であり、通常は複数の人間により生活が営まれていたと推定されよう。堅穴住居は、住むことで結びついたひとつの世帯である。ここに居住する人々が、快適な生活を送るには、複数の配偶者や複数の成人男女が日常的に同居することは無理である。成人であれば一組の男女、あるいは数人の同性者程度の居住であろう。さらに、ひとつの堅穴住居に居住していた人々から、子供の成長による世帯からの独立、あるいは何らかのトラブルによって世帯から分離する場合も少なくなかったであろう。逆に、居住人の移入もありうる。複雑な動きが堅穴住居跡の配置には想定される。

小林謙一は、堅穴住居跡に人間を寝かせることの可能な空間面積から居住者数を算出することが、現状では最も妥当性が高いとしている[小林 2004]。それは、堅穴住居跡に身展させることの可能な数であり、焚き火の有無、寝具などの条件からさらに少なくなることは、当然想定されよう。したがってここでは、仮に直径5 m程度の堅穴住居であれば、男女一組の成人、あるいは2・3人程度の成人の居住が可能であるという程度の想定としておく。敷石住居跡についても、これと大きな相違はない。ただし掘立柱建物跡は、住居以外の用途も想定して検討しなければならない。

### ③……………そのほかの集落施設

**各種の墓** 縄文時代中期から後期にかけての集落景観では、墓も大きな構成要素である。この時期の墓には、土坑墓、土器棺墓、それに配石墓がある。このうち配石墓は、東北地方南部縄文時代

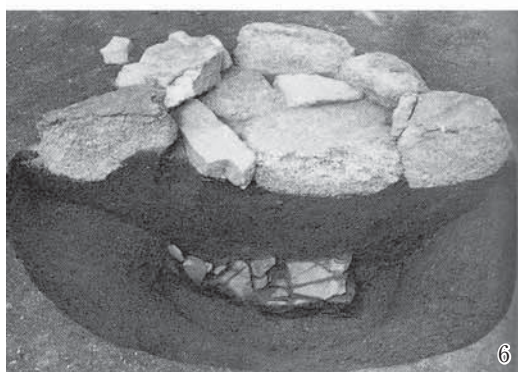
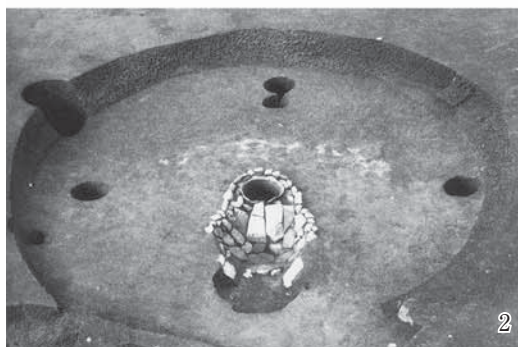
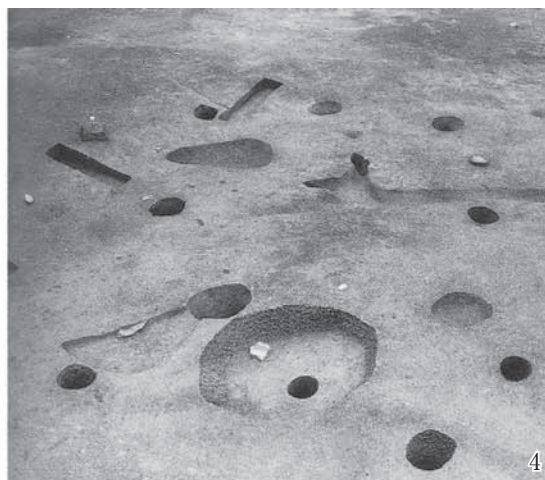


写真1 各種遺構 [福島県教育委員会 1990・1996]

- 1 春田遺跡1号竪穴住居跡(春田Ⅱ式期)
- 2 越田和遺跡26号竪穴住居跡(びわ首沢式期)
- 3 越田和遺跡21号竪穴住居跡(牛蛭式期)
- 4 越田和遺跡1号掘立柱建物跡(堀之内1式期)
- 5 越田和遺跡水場遺構(堀之内1式期)
- 6 越田和遺跡配石墓(堀之内1式期)



後期になってから普及する。墓跡と推定される遺構に土器埋設遺構がある。埋設された土器は、大型深鉢が中心で、これに小型深鉢や浅鉢、小壺が加わる。この土器は、正位に据えられたもの、逆位に据えたもの斜めに倒したものの、横に置かれたものがある。埋葬者の体格や遺体の状態により、土器の大きさや設置方法を対応させたのであろう。

斜めや水平に据えられた土器の下部には、焼成後に穿孔の施された例もある。土器内部の排水を意図した造作である。多くは比較的大型の深鉢が使用され、これを土坑内に横倒しの状態で埋納している。出土状態は土圧により押し潰れた状況である。土器の形状を保っている例は少ない。口縁

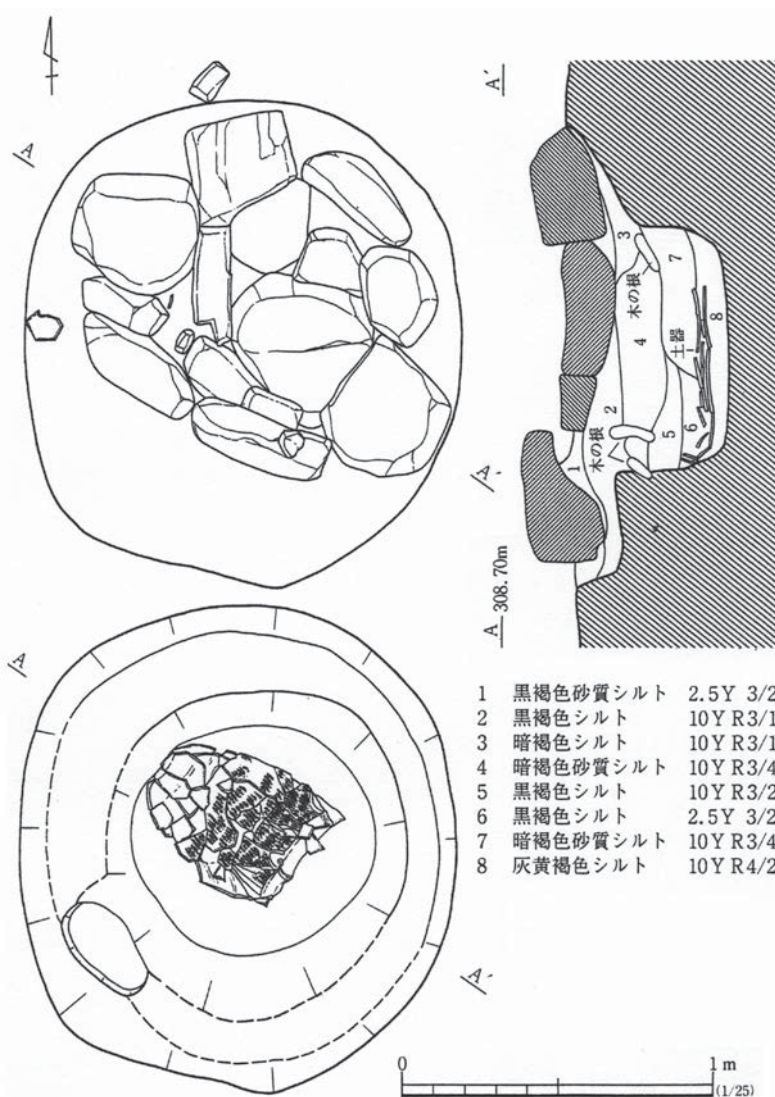


図20 配石墓 越田和遺跡7号配石墓[福島県教育委員会 1996]

部は土器や石材などによる閉塞の痕跡は無い。板木による閉塞も想定されるが、そのような痕跡は確認していない。使用される土器は、通常使用されるもので、特注品ではない。土器の破碎にともなう土層変化以外の埋土は、人為的に形成された痕跡を残している。

土器の内部からは、石器が出土することもある（越田和遺跡4号土器埋設遺構など）が、類例は少ない。人骨が出土した例では、郡山市町B遺跡20号土器埋設遺構において、歯牙列が確認されている[福島県郡山市教育委員会 2005]。土器に頭骨、あるいは頭骨片が納められたと推定されよう。堀之内1式期の例である。また上納豆内遺跡では、小児の火葬骨片が出土している[福島県郡山市教育委員会 1982]。阿武隈川上流域の土壌では、室町時代以前の土葬墓から人骨の遺存例は少なく、古墳時代の土坑墓でも歯牙のエナメル質がまれに遺存する程度である[福島県教育委員会 1982]。したがって人骨の出土例は少ないが、土器の埋納状況や後の配石遺構の下部構造との関連から、この種の土器埋設遺構を土器棺墓と考えても矛盾はない。以下では土器棺墓とする。ただし、土器棺に

転用された深鉢は大型といっても器高 80cm、直径 60cm 程度で、成人遺体を内部に納めることは困難である。遺体を適当な大きさにする前処置を前提とする埋葬方法が推定される。

びわ首沢式期では、屋外に設けられた土器棺墓の状況は遺跡により異なる。四合内遺跡や春田遺跡では、屋外の土器棺墓は検出されていないし、越田和遺跡でも 2 例を確認した程度である。規模の小さい遺跡では、土器棺墓の検出例は少ない。これに対して、継続的で規模の大きな集落跡では、多数の土器棺墓が検出されている。旧飯野町和台遺跡などである。この遺跡でも、土器棺墓の数は検出された竪穴住居数の 1/3 程度である。しかも竪穴住居間に散在して、墓地が特定の区域に限定されてはいない。

屋内の土器埋設遺構も、越田和遺跡のびわ首沢式期の竪穴住居跡 11 軒や春田遺跡の 7 軒でも、検出されてはいない。これに対して、仲平遺跡では、12 軒中 2 軒、四合内 B 遺跡では 4 軒中 3 軒の検出例がある。多くは土坑内に横倒し状態で土器棺が納められている。やはり、継続的な営みのある集落遺跡である。

竪穴住居内の埋設土器は、複式炉側面の左右で、側壁にそった場所に造られている。竪穴住居の床下に土器が隠れる程度の浅い穴を造り、水平方向に土器が埋設される。土器は、土圧により潰れた状況で出土する。土器の上面と床面との間は、埋土である。土器が潰れて生じた凹地を埋め直した状況である。この種の遺構の掘形では、床面からの深さが 1 m を越えることはなく、大半は土器が隠れる程度であろう。なかには、仲平遺跡 3 次 3 号竪穴住居跡のように、土坑の内部の土器上に平石が置かれていた例もある。この平石は、住居が廃絶した時には、床面に露出しない位置であった。陥没した土坑を埋め直したのであろうか。

屋外の土器棺墓が急増するのは牛蛭式期になってからである。郡山市馬場中路遺跡などである。越田和遺跡では、この時期の土器棺墓が 11 基確認されている。多くは土坑に横倒しに土器が埋設された遺構である。一方、屋内の土器棺墓は激減する。土器棺墓は集落に散在するのではなく、竪穴住居跡の周辺に造られている。やはり竪穴住居の住人と結びついて造られたのであろう。

屋外で検出される場合、多くは旧地表面を失っているので、土器が埋設された施設の深さを限定できない。また埋設土器の上に配石が造られていたかは不明である。墓坑の上に平石が据えられていた可能性のある遺構は、仲平遺跡 3 次 3 号竪穴住居跡が、この地域では古い例である。びわ首沢式期である。

配石墓が明確になるのは、堀之内 1 式期になってからである。堀之内 1 式期の配石墓は、特定の住居と近接して配置される傾向にある。そして堀之内 1 式期の後半には、集落の内部に配石墓群を形成するようになる。

配石墓は、地表面に楕円形あるいは円形に石列を造り、その内部に平石が充填される造りである。まず土坑の上面に平石や小石が敷かれ、それを縁取るように石列が造られる。石列の上面は、内部の平石上面より一段高くなっている。楕円形配石墓は、長径 1.5 m 前後である。

下部構造は土坑である。0.5 m 程度の深さで、埋土の土層は水平に堆積する特徴がある。配石の形状に合わせて造られ、楕円形と円形がある。楕円形では、成人をそのまま埋葬可能な大きさである。通常、土坑のなかに副葬品が納められることはないが、船引町堂平遺跡では、土製耳飾り、土偶片、土器片、獣骨片が出土している。土器片と獣骨片は、混入であろうか。また西方前遺跡第 4



群A配石遺構では、ヒトの歯牙が出土している〔三春町教育委員会 1992〕。越田和遺跡の4号土坑では、炭化した板材が底面近くから水平に置かれた状態で出土した。棺材の一部であろう。

円形の場合でも比較的大きな土坑が設けられている。越田和遺跡7号配石遺構では、深鉢の土器棺が出土した。土坑の底面に水平に置かれた深鉢が、土圧で押しつぶされた状態であった。深鉢の口縁は開口した状態であった。ただし、板材などで塞いでいた痕跡は不明である。墓坑の大きさ、

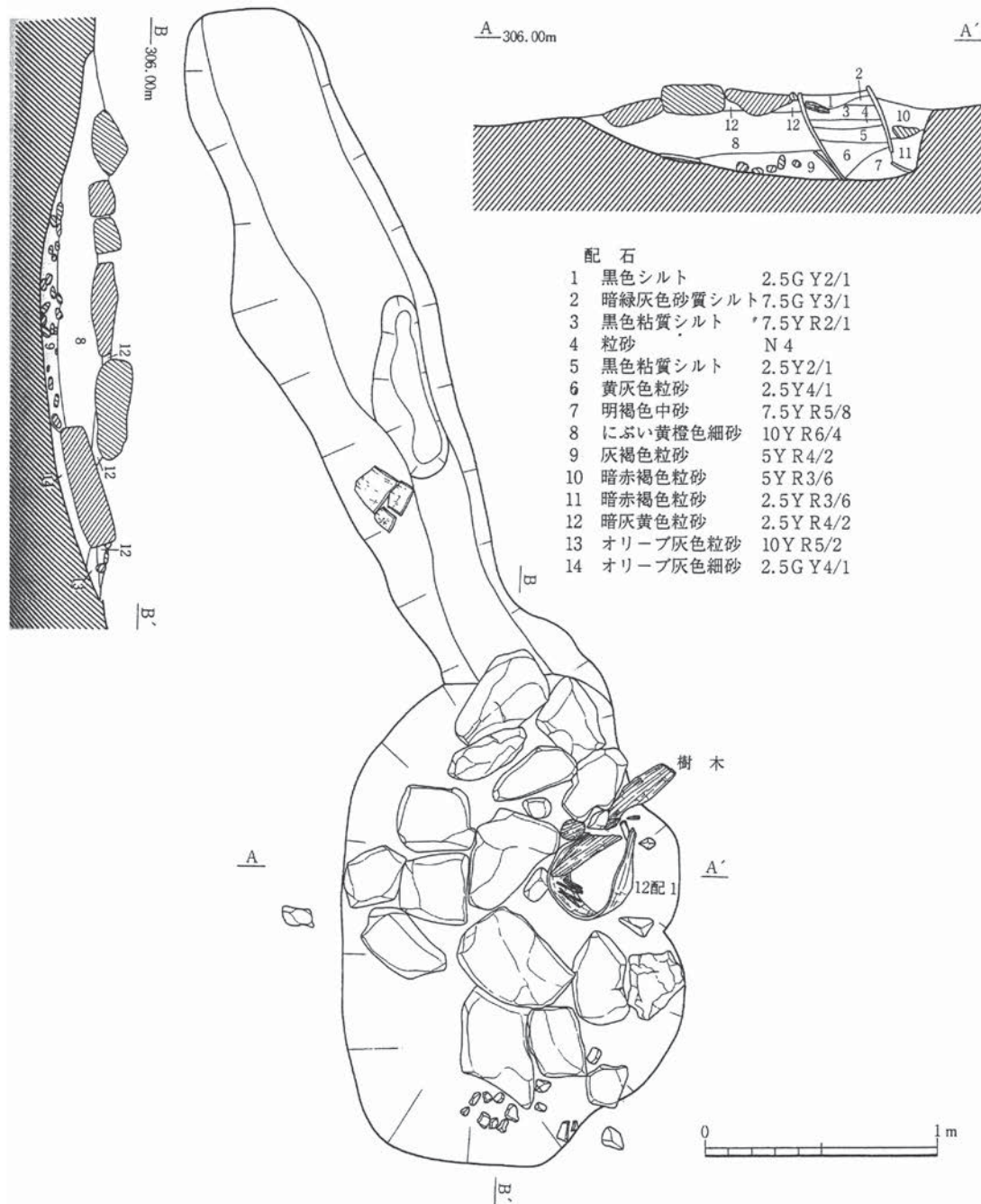


図21 水場遺構(牛蛭式期) 越田和12号配石遺構〔福島県教育委員会 1996〕

堆積土の状況からみて、単葬墓であろうと推定している。

このほか、土坑墓と推定される遺構もある。土坑の内部は人為的に埋め戻した状況が認められ、若干の遺物が出土することがある。人骨が出土しない例が大半で、限定は難しい。やはり、住居跡の周辺から検出されている。

越田和遺跡では長方形土坑の長側面に沿って炭化材の検出される例があった。長さ 1.5 m、幅 0.7 m 程度である。深さは、0.3 m 程度であったが、削平や自然侵食の可能性もあり、本来の深さは不明である。炭化板材は棺の痕跡であると考えている。配石墓の土坑からも同様な木片を確認している。地表面の状況は不明である。何らかの標示物が推定されるが、遺存した例はない。

集落内に造られた墓は、集落住人の結びつきを反映していよう。生物としての死ではなく、世帯の一員、集落の一員として死者を葬ることにより、死者は集団のなかに死後もその地位を占める。死者を弔らい、墓を造ることにより、残された人々の間で人間関係の再構築がなされることになる。墓と墓の結びつきは、集落内部の人間間の結びつき関係の一端を反映していよう。したがって、生活の定住化とともに、集団墓が営まれるようになる〔鈴木 1980・藤本 1982〕。定住集落は、限定した土地を集落構成員が占有とすることである。世代を超えて占有を継承する表徴として、墓が造られたのである。

**水場施設** 定住生活を維持する上で、清水を得るために水場を確保することは不可欠である。越田和遺跡では、びわ首沢式期、牛蛭式期、堀之内 1 式期の各水場遺構を検出している。いずれも集落が立地する扇状地が河川の浸食により、小さな崖を形成する場所である。自然の清水が湧き出す場所である。各時期 1 基である。集落全体の共用施設であろう。

びわ首沢式期の水場は、湧水地点に大型深鉢の上端 10cm 程度が地表面から出るように埋め、周囲には平石を置いて足場としていた。深鉢の下部は打ち欠いてある。深鉢の下半部に砂利が詰められていた。湧水を汲み出す時に泥土が巻き上がらない工夫である。さらに深鉢の周囲に平石を配置して、足場が造られていた。水場から流れ出した湧水を排水する溝もあり、また湿地を越えて水場に至るために木道の痕跡も確認している。

牛蛭式期の水場は、長さ 2.5 m、幅 1.5 m、深さ 0.3 m の土坑を設け、湧水線近くには、土坑底面を一段掘り下げて、円筒状に打ち割った大型深鉢を据えていた。土坑の底面には砂利を含む砂を敷き、その上には粗砂が詰められていた。土坑の上面には、板石を敷いていた。土坑と深鉢の間に粗砂を粗砂詰めることにより、深鉢の内部に溜まった清水を汲み出せば、粗砂の間に湛水した水が深鉢に供給されることになる。民俗例という水袋である。深鉢から溢れ出た余水は、溝を設けて排水するようになっていた。

堀之内 1 式の水場は、崖面の中腹の湧水線に土坑を設け、湧き出た清水を貯める池からなる。土坑は、0.8 m 程度の矩形で、深さは 0.4 m 程度である。崖側の三方を板材で保護し、貯水部との境にも敷居状に樹皮を除去した木材が据えられていた。貯水部は台形状で、幅 3 m、長さ 3 m 以上である。樹木皮を杭で固定した壁も造られて、底面にも敷かれた板材が部分的に遺存していた。清水の汚濁を防ぐためであろう。

この施設は、土器を据えた構造の水場より多量の清水を得ることが可能になる。湧水地点の土坑を区画すること、板材や樹皮で壁や底を保護することにより、汲み出しにともなう泥土の巻き上が



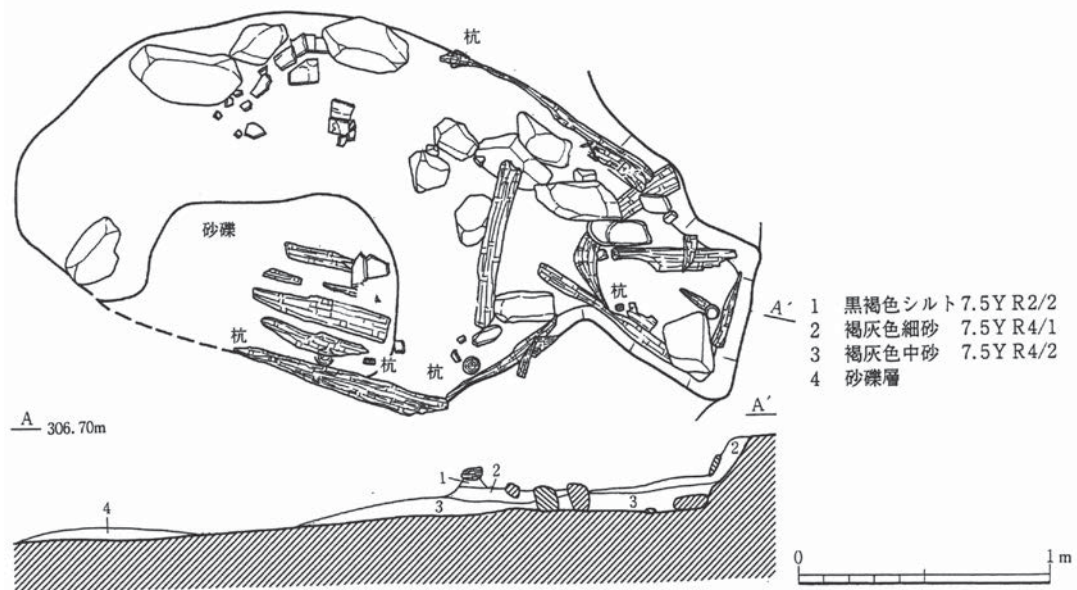


図22 水場遺構(堀之内1式期) 越田和遺跡[福島県教育委員会 1996]

りを防ぐことにもなる。水場を中腹に造ることにより、近くにある蛇石川の増水による汚染の可能性も少なくなるし、水を汲み出すために湿地に降りなくてもすむようになる。貯水部は、堅果類のアク抜きに使うことも可能である。

**貯蔵施設** 縄文時代中期中葉には、集落に近接して造られた大型土坑群が知られている。この種の土坑群のなかには、住居は造られない傾向がある。磐梯町・猪苗代町にまたがる法正尻遺跡、郡山市妙音寺遺跡、楡葉町馬場前遺跡などである。土坑は下半部の断面形が三角形で、上部が円筒形のフラスコ形が古く、新しくなるにしたがい円筒形に変化する。太平洋岸の相馬市境A遺跡では、直径1～2m、深さ3m以上の円筒形土坑が100基以上も尾根上に群集していた[福島県教育委員会1988]。春田Ⅱ式・びわ首沢式期である。これらの土坑群では、内部を細分する単位は不明瞭である。土坑は、各住居や住居群に対応するのではないらしい。

各土坑は群集しているが、重複していることは少ない。地面に所在を示す標識が設けられていたのであろう。堆積土は、縞状の重なりや崩落土の塊で満たされており、人為的に埋め戻された形跡がある。出入りには梯子が使用されたと推定され、土坑底面に小さなくぼみを認めることもある。壁面に足掛け状の抉りを設ける例もわずかにある[福島県教育委員会1988]。

縄文時代中期中葉の土坑からは、深鉢が数多く出土する。柴原A遺跡の1号土坑からは、オニグルミ核果とドングリ類種子片が出土している[福島県教育委員会1989]。土坑に貯蔵された食料の一端を示していよう。この種の大型土坑の群集は、びわ首沢式期になると少なくなる傾向あり、完形土器もほとんど出土しなくなる。一方、複式炉をとまなう堅穴住居跡の周辺に、貯蔵穴形土坑も検出される傾向がある。

佐藤啓の教示によれば、福島県内において縄文時代の堅果類は約50基の遺構出土例がある。このうち、縄文時代中期末葉を境にそれまで土坑から出土した。堅果類炭化物は、堅穴住居跡からの出土例が増加するという。各堅穴住居で、個別に食料を貯蔵する傾向が強くなったことの反映であ

ろう。

飯野町（現福島市）和台遺跡 2 号住居跡からは、炭化クリがビニール袋にして 7 袋が出土している〔八巻 1977〕。これについては、堅穴住居の屋根裏空間を利用した貯蔵が想定されている。さらに和台遺跡 183 号堅穴住居跡からは、クリを中心にオニグルミとトチの炭化物が 64 k g も出土している〔飯野町教育委員会 2003〕。この出土状態について、報告書では住居が廃絶した後に行われた祭式・儀礼の可能性を推測している。①複式炉上の土器投棄儀礼、②クリの蒸し焼き祭式・儀礼である。

しかし①は複式炉直上の出土であり、住居の廃絶に伴う状況であるという解釈もできよう。②では、二次的な掘り込み面の形状が不定形であること、蒸し焼きによる焼土面の形成も不明瞭である点から、廃絶にともなう土層堆積の仮定で形成されたという判断も可能かと推測している。この住居の堆積状況を現地で確認したわけではないが、報告された土層断面図や写真の一部からは堅穴住居下部の堆積土を 3 時期に区分する必要はないようにみえる。この例を祭式や儀礼とするには類例が乏しい。少なくとも普遍的に行なわれた行為ではない。特例とするよりは、八巻一夫の考えを尊重したい。

**焼土面と屋外炉** 土器埋設遺構の屋外炉は、旧地表面で開口した状態で土器が据えられ、内部には炭化物がともなっている。さらに周辺には焼土面が形成され、炭化物なども散布している。複式炉の土器埋設部と同様な状況である。

また柴原 A 遺跡では、地表面に石囲炉も設けられていた。掘立柱建物跡の有無に留意したが、存在は確認していない。環状に石が配置され、石囲の内部と周辺に焼土面が形成されていた。周辺には 2 m 程度の範囲に木炭粒が散布している。石囲の内部には土器片が敷かれている例もある。柴原 A 遺跡から 4 基を検出した。

焼土面は、柴原 A 遺跡で 97 基、越田和遺跡で 7 基を検出した。直径 2 m 程度の大きなものは、広場の周辺や、東西の敷石住居群の間に形成されている。通常、焼土面が形成される地表面は、裸地や下草のない樹林である。藪や下草の繁茂する樹林での焚き火は、引火の危険がともなう。敷石住居間に樹木が存在した痕跡は確認していないので、焼土面が分布する範囲は、裸地に近い状態であろう。

柴原 A 遺跡の各焼土面は、熱変化を受けた硬化層が形成され、周辺には炭化物や獣骨片が散布している。動物の種類が特定できたのは、イノシシとニホンシカである。植物遺体には、オニグルミ、クリ、ドングリ類とコナラ亜属と針葉樹などの小枝片がある。受熱痕跡のある獣骨と堅果類の炭化物が焼土面から出土することは、この場所で調理が行われた痕跡であろうか。獣骨の碎片は食残滓であり、そのまま食事の場となったことを示している。

通常、焼土面が地表に形成されれば、それは雨水や霜柱などによって損なわれる。さらに動植物の活動も加わって焼土の硬化面は急速に崩壊する。一年の四季を経過すれば、地表に形成された焼土面の大半は崩壊して、所在は不明となる。ところが柴原 A 遺跡では、砂層に覆われた旧表土面上に、多数の焼土面が検出されている。この表土面が砂層に覆われた時に形成されていた焼土面であり、それが自然崩壊するまでの比較的短時間に砂層が形成されたことを示している。柴原 A 遺跡の縄文時代後期の旧地表面は、それが当時の状況を良好に伝えていると考えられる。



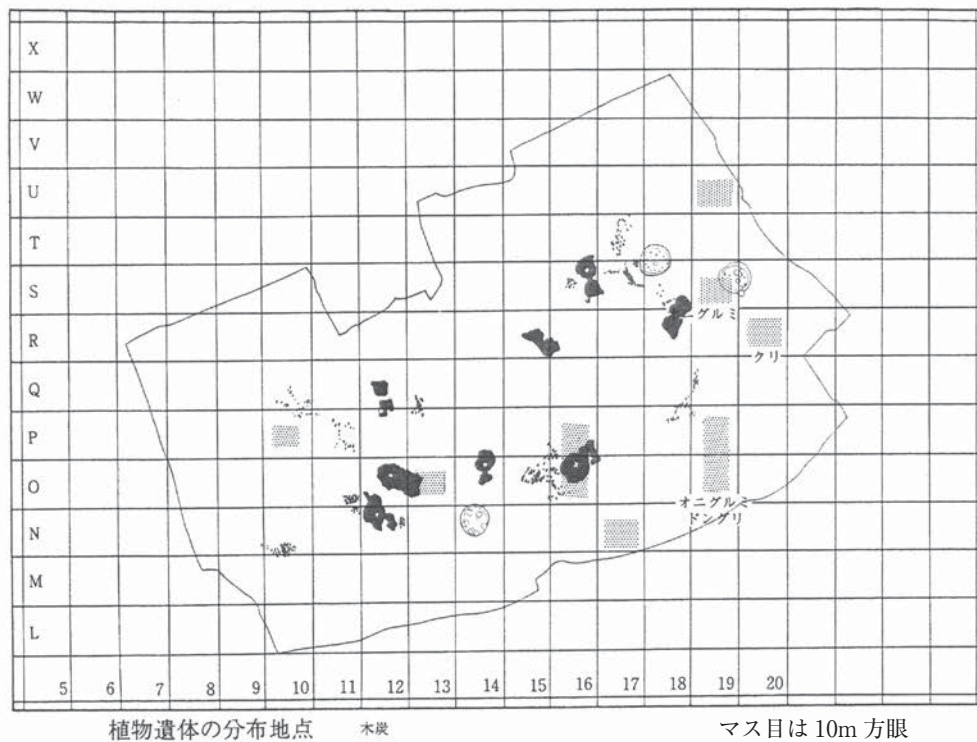
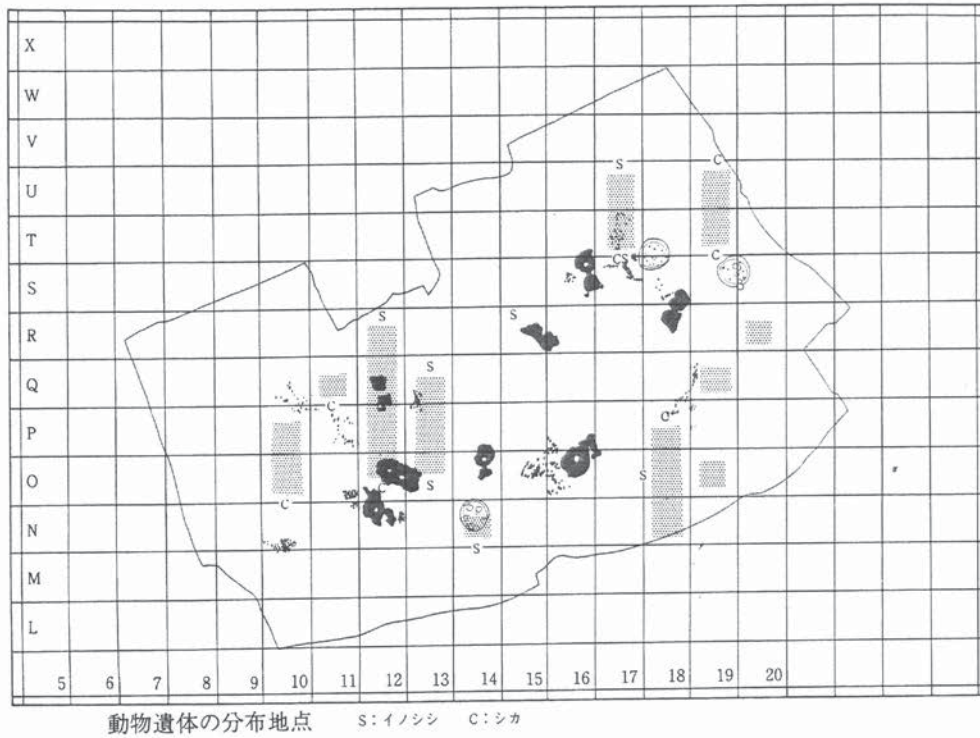


図23 柴原A遺跡動植物遺体分布状況[福島県教育委員会 1989]

**広場** 柴原A遺跡のように、円形の裸地となって、周囲に集落施設の配置される例は少ない。飯野町（現福島市）和台遺跡では、南北二つの広場が確認されている。このうち北側の広場は直径30 m程度で、広場には掘立柱建物跡が配置され、さらにその外側に竪穴住居跡が検出されている。集落全体を規制する施設配置に基づいて造られた計画性の高い集落である。また郡山市上納豆内遺跡では、総数111軒の複式炉をともなう竪穴住居が直径約50mの広場を取り囲んで造られていた。ただしこの広場からは、土坑や掘立柱建物跡などの遺構は検出されていない。

多数の竪穴住居跡が検出される遺跡でも、広場が設けられていない例も少なくない。本宮町（現本宮市）高木遺跡などである。しかし密集する住居跡群のなかに、居住施設の分布しない空間がある。同型式期の竪穴住居が列状に配置された周辺、住居群のまとまり間の空間である。このような空間も、広場の一種であろう。越田和遺跡でも、水場遺構近くの段丘平坦面には遺構の空白地区がある。竪穴住居群の中心にはないが、広場のひとつであろう。

広場は、集落の住民にとって交流の場であり、各種の集まりや協業の場である。共用施設である。集落の住人が数人程度であれば、竪穴住居程度の空間に集まって各種のあつまりに対応できよう。しかし数十人ともなれば、それなりの空間が必要になる。集落社会を維持するために、広場が設けられたのである。

**生活廃棄物処理** 多くの場合遺物包含層として認定される遺構である。有機物は分解・消失する。貝塚等でない場合、遺存することは稀である。出土物は、土器と石器が主体である。遺物包含層は、集落周辺に形成されている。通常は沢地や崖面である。三春ダム関連遺跡では、廃棄された竪穴住居の凹地に、遺物包含層が形成された例は少ない。仲平遺跡3次3号竪穴住居跡は、少ない例の一つである。この竪穴住居跡は大型で、崖面近くに造られていたことから、廃棄場とされたのであろう。

竪穴住居跡の分布と重なるように遺物も散布している。これは、遺構が攪乱を受けて散乱した遺物と、住居の周辺に廃棄された不用品が起源であろう。これに対して、裸地の広場では遺物出土量は少ない。この部分に、生活廃棄物を投棄できない規制があったからであろう。

生活廃棄物は、集落における消費生活の痕跡である。生活廃棄物が形成される場所は、集落における消費のまとまりを反映している。それは個人であり、住居・住居群、あるいは集落全体というまとまりである。あるいは、祭祀や協業など各種の活動にともなう廃棄物もあろう。

## ④……………越田和遺跡の集落変化

越田和遺跡は、大滝根川の支流、蛇石川の北岸に位置している。遺跡は丘陵の裾部に立地して、北側は丘陵、南側は蛇石川の氾濫原である。おおよそ南北110 m、東西140 mの範囲に集落が形成されていた。北側の丘陵谷部を扇の要として、南に開く小さな扇状地である。北端の標高は313 m、南端部は305 m前後である（写真2-1）。

縄文時代後期前半の遺構検出面は、丘陵からの厚い流出土によって覆われていた。遺構検出面は、縄文時代の旧地表面でもある。とくに遺跡の北半部では、丘陵から流出した土砂が繰り返して堆積していた。これとともにまた、自然の侵食作用の影響もあり、削平の進行した地区もあった。平安時



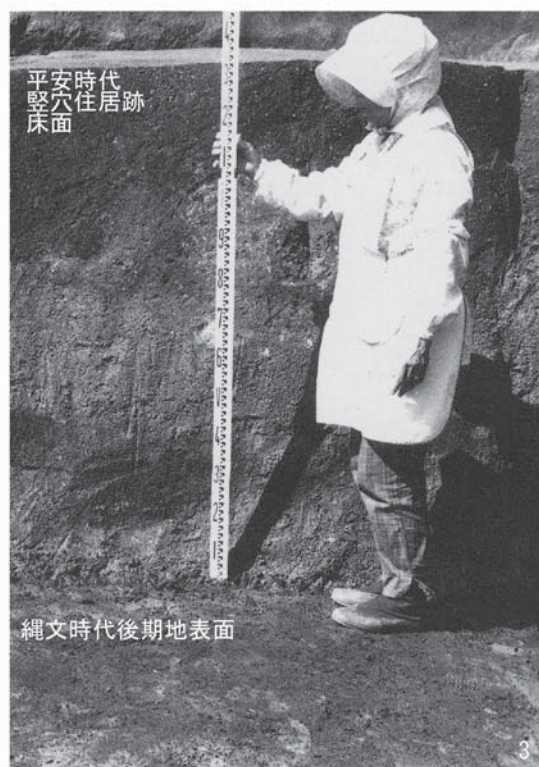


写真2 越田和遺跡 福島県教育委員会 1996(一部改変)  
 2 5号敷石住居跡(堀之内1式期) 1 越田和遺跡周辺(上が南)  
 3 縄文時代後期地表面検出状況

代の竪穴住居跡の床面との比高差は1.3～2 m以上もあった(写真2-3)。これに対して南部では、丘陵部からの流出土は比較的少なく、しかも表土化の進んだ黒褐色土に変化していた。それでも1 m近い堆積がみられた。

縄文時代中期から後期の段階で、遺跡の西端部は段丘崖が発達した急崖になり、南東部はそのまま谷川の支流に続いていた。遺跡の西部は北中央部から南東に張り出す緩斜となり、東部は北から南に傾斜する浅い凹地面である。

蛇石川は川幅5 m程度である。水田が造られる以前は、流路の両側に氾濫原を形成して蛇行し、湿地や小さな水溜りが連続する状況と推定される。そして狭窄部の峡谷では、小さな滝が連続する急流となる。ときには狭窄部の斜面が崩壊して、流路上に自然ダムが出来ることもあった[福島県教育委員会1993]。

越田和遺跡で検出したびわ首沢式から堀之内1式の遺構は、次のとおりである。竪穴住居跡42軒、掘立柱建物跡5軒、敷石住居跡6軒、土坑97基、焼土面5基、屋外囲2基、土器棺墓8基、配石墓8基、水場遺構3基、石列・集石など、それに遺物包含層などである。つぎに土器型式期別に遺構をまとめてみる。

**びわ首沢式期の遺構** 竪穴住居跡 14軒、土坑18基以上、土器棺墓2基、水場遺構1基、遺物包含層などである。竪穴住居跡以外の遺構は少ない。これは集落の南部から検出された竪穴住居跡が、複式炉や柱穴のみとなり、竪穴の壁を失っていることから、旧地表面が侵食され、表層に近い遺構が失われたことも関係していよう。ただし、大型円形土坑などは検出されていないので、この遺跡では設けられていない可能性は高い。土器棺墓も8号埋設土器遺構のみである。少ない。

土器片などの遺物は、竪穴住居の営まれた緩斜面から段丘崖の斜面にかけて散布していた。緩斜面の遺物は、集落の地表面に散らかった状態であり、この範囲では日常生活の活発な活動があったことを示している。裸地となっていた範囲であろう。竪穴住居間の空地は、広場である。西南部から西部にかけては、出土する土器片の破片も大きい傾向があり、主な廃棄場であった。

竪穴住居跡は、おおそ4群に分かれて検出されている。遺跡の東部では、丘陵の裾線に並んで11・13・14号の竪穴住居跡、これよりやや離れて12号竪穴がある。この一群と対応するように凹地の西端に17・22号の2軒がある。東部では11・41号、13・14号、17・21号が2軒ないし3軒をまとまりにしている傾向がある。西部では、丘陵裾近くに42号と39号の2軒が点在し、他の竪穴住居跡から少し離れた位置に造られていた。また、南西部の平坦面には10・25・28・32号の4軒がある。

各竪穴住居は、円形掘形3本柱構造で、複式炉も土器埋設部石囲部、それに前庭部で構成されている。規模も直径5 m前後で、大差はない。これにともなう深鉢も、体部下半部が縄文、上半部が凹線区画のアルファベット文である。びわ首沢式新相期である。住居構造は画一的で、これにともなう土器型式にも新旧の認定は困難である。また、主柱穴の重複や造り変えの痕跡も未確認で、各住居跡間に同一型式間の重複関係はない。竪穴内部の堆積状況も、中央部に黒褐色土が厚く形成されていた。住居が廃棄された後に自然堆積で形成された土層である。牛蛭式期の土器も含まれるが、破片が混ざる程度である。

このなかで、39号竪穴住居跡は、単独で造られている。しかも、牛蛭式期や堀之内1式期の住



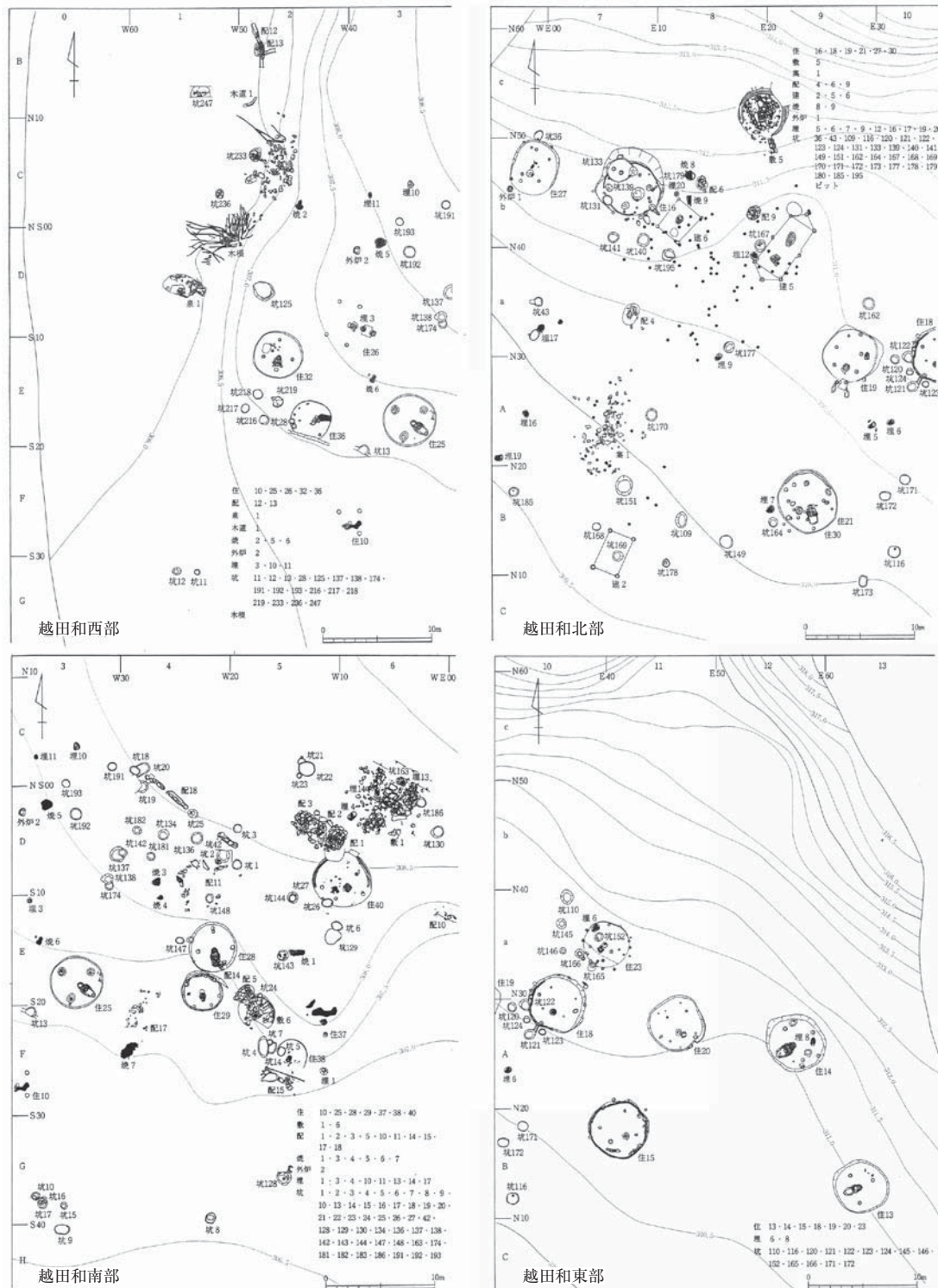


図24 越田遺跡主要部分図[福島県教育委員会 1996]

居跡と重複している。この場所は越田和遺跡で集落を営む場合、要の位置にあったからであろう。東西の堅穴住居群とはややはなれて、一段高い場所である。これを起点に東西に堅穴住居が配置され、住居間は草木のない裸地となっていたのであろう。そして住居群から一段下の湿地には水場が営まれていた。

びわ首沢式期の堅穴住居跡数 14 軒は累積結果であり、それが 4 群に分かれて造られていた。集落内における堅穴住居間の距離は、居住者間の間をあるいは親疎関係を反映していると考えれば、この集落は 4 群の住人群で構成されていたことになる。ただし、ひとつの土器型式の時間幅は、住居が機能する期間よりは長いことから、同時に機能していた堅穴住居は、これより少ないことになる。この 14 軒は、同時に存在していたのではない。4 群のなかにも、核となる住居があって、そこから分離した居住者や新たに近い関係を結んだ居住者が想定されよう。これら 4 群の住居群の要の位置にあったのは、39 号住居の居住者であろう。

4 群の堅穴住居群で同時に機能していた堅穴住居を 2～3 軒と仮定して、2 節の説明から、堅穴住居の居住者を男女一組の成人あるいは 2・3 人の同性成人とすれば、この時期の成人数は、最小 16 人、最大 36 人程度となる。最小・最大数ではなく、住人数は  $20 \pm a$  人であろう。単婚世帯にしては多すぎる人数である。血族集団や縁者の集まりを基本とする集団と理解することもできよう。

この時期、越田和遺跡の堅穴住居群は画一的で、出土する土器に時期差もない。食糧貯蔵用土坑の形成もないこと、墓と推定される遺構も少ないことからすれば、集落が営まれた期間は短く、集落を営む堅穴住居間に大きな生活格差はなかったと推定される。集落周辺の資源を消費した後は、新たな場所に移動したのであろうか。

同様な遺跡に春田遺跡がある。集落の東端部が自然の侵食により崩壊しているが、同期の堅穴住居跡 7 軒が検出されている。3 本柱以上の堅穴住居構造で構成されていた。春田Ⅱ式期の集落である。やはり、貯蔵施設や墓の希薄な集落である。

これに対して西方前遺跡では、集落の一部が調査されたにすぎないが、縄文時代中期末葉の 17 軒の堅穴住居跡が 5 時期に区分されている。重複関係、建替えも顕著で、土器棺墓も多数造られている。比較的長期間に集落が維持された例である。仲平遺跡も、この例であろう。

越田和遺跡の周辺では、柴原 A 遺跡と対岸の柴原 B 遺跡において、両遺跡を合わせて、大きな集落が形成されていた。柴原 A 遺跡の東端では、3 次調査によって河川に沿って、この時期の堅穴住居跡と土坑の存在が確認されているし、柴原 B 遺跡でも堅穴住居跡と大型土坑が検出されている。また、柴原 A 遺跡の広場の周辺にも堅穴住居跡の分布が確認されている。さらに広場では、堀之内 1 式新相以前の土坑群や柱穴群が検出されている。この時期における施設の整った集落のひとつであろう。

河川を挟んで集落施設が形成される景観は、阿武隈高地北部の真野川上流域でも確認されている。飯館村上ノ台 A 遺跡〔福島県教育委員会 1984 など〕や日向南遺跡〔福島県教育委員会 1986 など〕などでは、河川兩岸に分散して、居住域や墓域、貯蔵施設域が形成されていたと推定されている〔井 1996〕。

阿武隈川上流域では、飯野町（現福島市）和台遺跡が大規模な集落遺跡である。多くの堅穴住居跡が重複して、古い構造の堅穴住居から新しい堅穴住居が継続して検出されている。和台遺跡は、

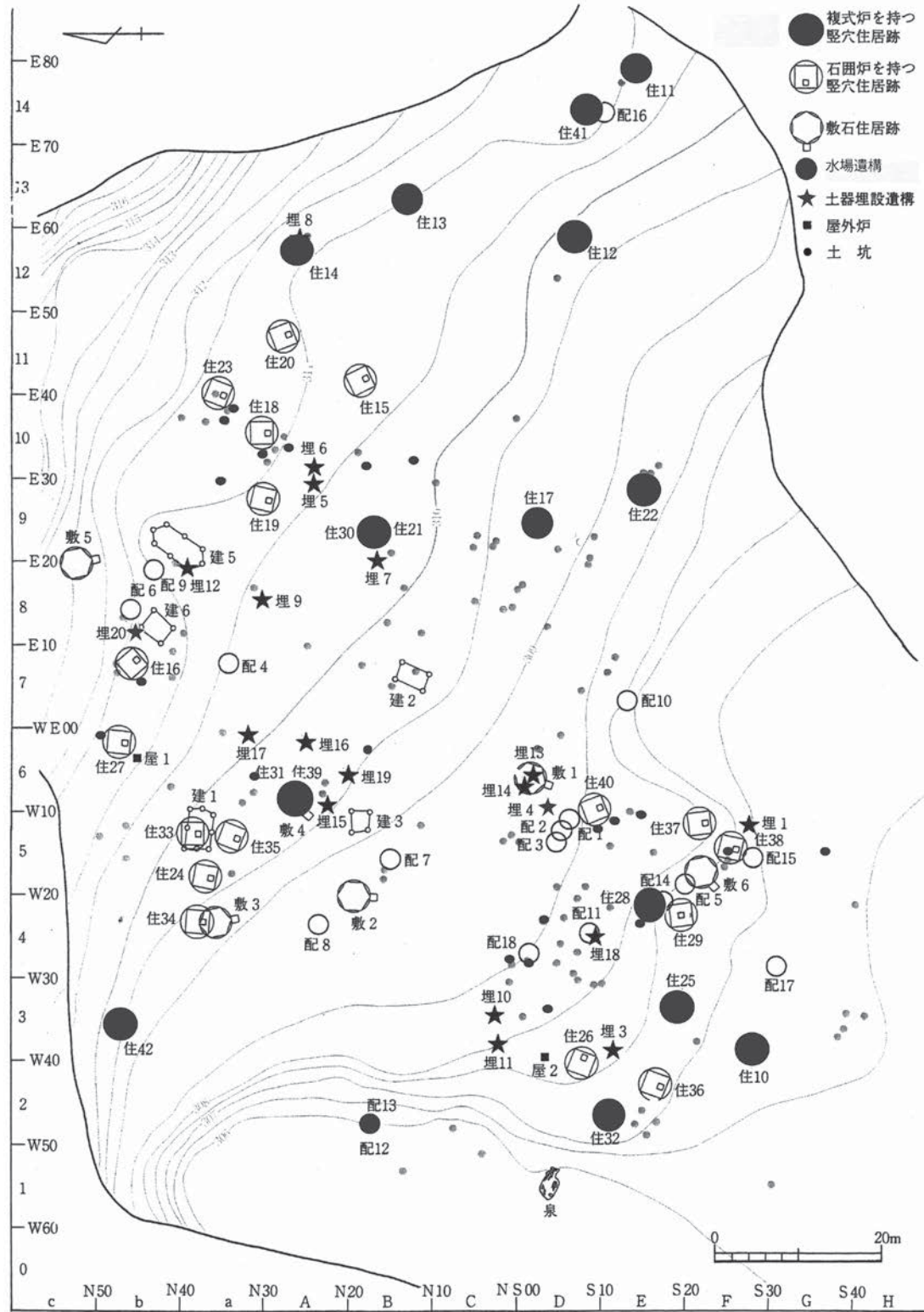


図25 越田和遺跡遺構分布図(びわ首沢式期)



阿武隈川の湾曲部を臨む丘陵上に立地している。縄文時代の集落が立地する上で、好条件となる場所である。集落の中央部を貫くように調査区が設定され、大木 9・10 式期の竪穴住居跡が 230 軒以上も検出されている。丘陵尾根上に南と北に円形広場があり、竪穴住居はこれを挟んだ丘陵平坦面の端に集中していた。しかし、重複が著しいこと、大木 9・10 式期の全般にわたって集落が維持されていることからすれば、同時に存在した竪穴住居数は、最大でも 30 軒程度と推定されている〔飯野町教育委員会 2003〕。

縄文時代では、大規模集落といっても、同時に存在する竪穴住居はそれほど多くはないようである。小林謙一によれば、縄文時代において 20 軒以上の竪穴住居があれば大規模集落であったという〔小林 2004〕。大規模型集落は、周辺環境や他集落との関係において立地条件に恵まれ、継続期間が比較的長期にわたった結果、多数の竪穴住居が形成されたのであろう。集落の施設も、小規模集落と基本的な相違はない。墓地の形成が未発達な点は、集落が継続していたのではなく、形成と廃棄が繰り返された結果であろう。

新井達哉によれば、中通り地方（阿武隈川上流域）において縄文時代中期後半の集落、おおよそ 120 箇所のうち大規模集落は、和台遺跡と高木遺跡・上納豆内遺跡の 3 箇所であるという〔新井 2005〕。これらも、同時に存在していた住居数は、最大で 30 軒程度であるという。継続的に営まれた集落でも、他の集落と比べて飛躍的に規模を大きくすることはなかった。この地域では、大きく突出した規模の集落は存在しない状況である。規模を大きくするための生活物資を蓄積するシステムが出来ていない状況では、集落を大きくすることが地域で有利な状況になかったからであろう。

この時期の集落は、丘陵地帯の河川近くに精粗なく分布している特徴がある。この一方、山間高地では分布が希薄になる。会津南部の山岳部や奥羽山脈では、とくに希薄である。福島市摺上川上流では、ダム建設にともなう発掘調査が実施されているが、縄文時代中期後半の集落跡は少ない。阿武隈高地においても、多くの遺跡で試掘調査が実施されたが同様である。生業の基盤が丘陵地帯にあったことを示している。

**牛蛭式期** この時期の遺構は、竪穴住居跡 19 軒、掘立柱建物跡 1 軒、土器棺墓 11 基、土坑 21 基、水場遺構 1 基である。竪穴住居は、遺跡北部の高台部分と南西部の平坦面にまとまって形成されている。一方南東部では希薄になり、41 号竪穴住居跡が単独で検出された程度である。この竪穴住居跡は、牛蛭式の古い段階で、退化した複式炉をともなっている。周辺に顕著な遺構もないことから、比較的短期間に廃棄されたのであろう。遺跡の東部で竪穴住居群が希薄になることは、この時期の集落が以前の竪穴配置とは別な意図で営まれたことを示している。

5 号掘立柱建物は、高台の中央に造られている。柱配置は長六角形で、長さ 7.8 m、幅 3 m である。比較的大型の建物跡である。集落の要の位置に造られた建物である。建物跡の周辺では、12 号土器棺墓があったが、これ以外の遺構は乏しい。生活痕跡の希薄な建物跡である。掘立柱建物という空間の確保に優れた特性があり、日常的な生活施設というよりは共用施設であろうか。

竪穴住居群は、大きく 3 群に分かれて造られていた。東群は、5 号掘立柱建物跡を境に東側に 15・18・19・20・21・23 号の竪穴住居跡 6 軒があり、これを取り巻くように 5～8 号の土器棺墓や土坑がある。また西側には、西群の 16・24・27・31・33・34・35 号の 7 軒の竪穴住居跡があり、やはり 15～17 号の土器棺墓と土坑がある。西南部でも遺構のあり方は同様である。南群の 26・

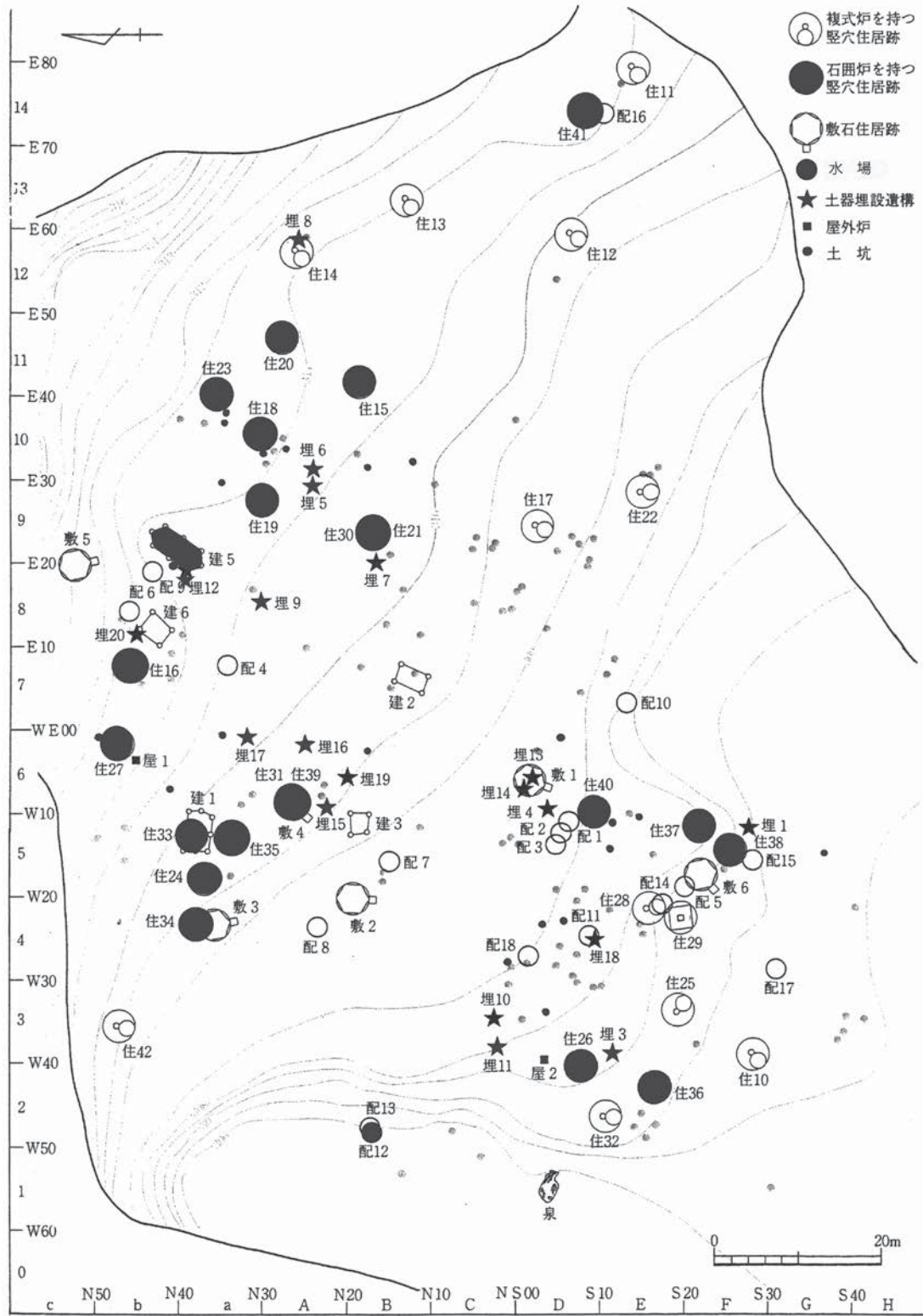


図26 越田和遺跡遺構分布図(牛蛭式期)

36・37・38・40号の5軒の竪穴住居跡であり、3・11号の土器棺墓や土坑がある。集落と土坑・土器棺墓の集中と分布らみれば、びわ首沢式期を継承して、ほぼ同じ位置に造られている。水場遺構も重複していた。

びわ首沢式と重複する竪穴住居跡は、30号と21・31号と39号の2例である。下層遺構である30号と39号では、床面に5cm前後の土層が堆積していた。明確に人為的な埋め戻しを行って造り替えた痕跡はみられない。複式炉の型式からみても、牛蛭式に直結する特徴はないことから、集落形成期間に断絶があったと推定される。

これに対して41号竪穴では、退化した複式炉と石囲炉が同一床面で検出された。報告書では、同一住居の造り替えとしたが、複式炉と対応する支柱の位置と石囲炉の住居掘形が重なっていることから、別の住居跡とすべきである。

各竪穴住居跡の直径は、31号竪穴住居跡が直径5.6mで最大、36号竪穴住居跡が3.7mで最小である。多くは5m前後に集中している。格差は比較的少ない。また小型の竪穴住居では、支柱穴が設けられなくなる。36号のような小型竪穴住居跡は、これ1軒のみであった。

土器棺墓は住居と無関係に造られたのではないらしい。特定の竪穴住居の周辺に集中する傾向がみられる。31号竪穴住居跡の周辺には、これを取り巻くように4基が配置されている。また18・19・21号竪穴住居跡の近くにも4基の土器棺墓、26号竪穴住居跡の周辺に2基などである。これらの竪穴住居にかかわる人物が埋葬されたのと考えるのが自然であろう。これと関連して、土坑も分布している。

竪穴住居が造られていない範囲は、竪穴住居群の東群と西群の間、西群と南群の間である。この部分は、土坑などの分布も希薄である。集落で広場のようにして利用されていたのであろうか。広場の西端下側に水場遺構が設けられていた。

びわ首沢式の集落と比べると各住居が近接して造られるとともに、集落を構成する住居群の存在が明白になっている。さらに住居数も増加している。これとともに、竪穴住居にともなう土器棺墓、つまり墓が営まれるようになる傾向がある。

牛蛭式期の竪穴住居間に重複関係はない。土器型式や住居構造からも、さらに細分する根拠は得ていない。竪穴住居の堆積土は、黒褐色土を基調としている。自然堆積土である。竪穴住居が近接して造られているにもかかわらず、人為的に埋め戻された痕跡は乏しい。竪穴住居が廃棄された後は、凹地となっていたのであろう。この部分に生活廃棄物が投棄された痕跡はない。同時存在を証明することは困難であるが、これを否定する根拠も乏しい。石囲炉は、住居床面の斜面よりに造られる傾向がある。出入り口の方向であろう。そして各竪穴住居群は房状に配置されている。

この時期の集落が3群の住居（掘立柱建物を含む）群に分かれることから、それは集落を形成する集団のまとまりと考えられよう。これら住居群が近接して房状にまとまっていることからすれば、さらに住居群も各住居の居住人に細分かれていたことになる。ただし住居群における同時存在数は、検出数より少ないのは当然である。

また住居群には、墓がともなっている。やはり住居群の核となる竪穴住居の周辺に3群の土器棺墓が配置されている。このほか時期の限定できない土坑墓もある。近接して造られた墓は、やはり人間関係の結び付きを反映しているであろう。墓が住居群と同じく3群に分かれることは、この対



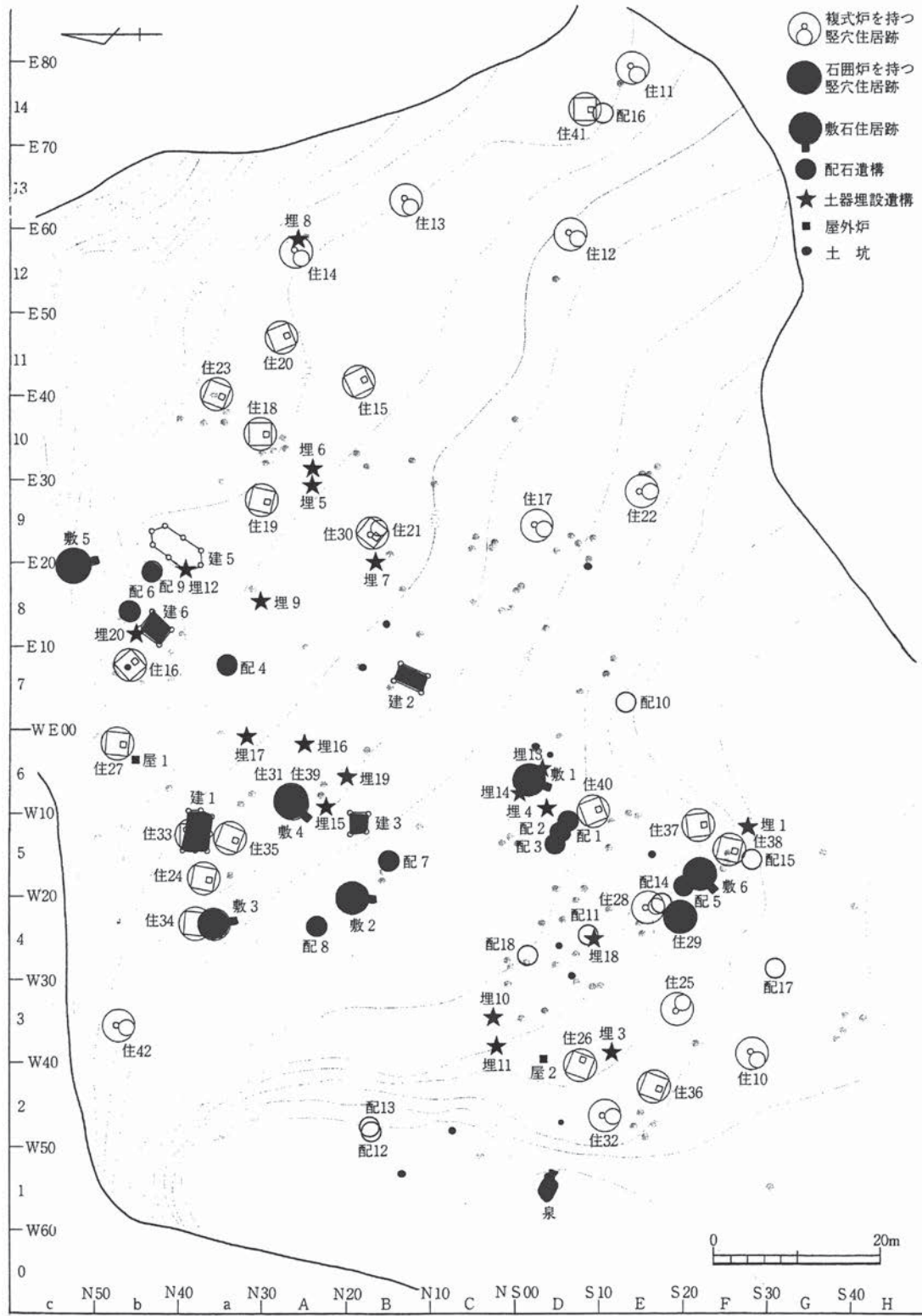


図27 越田和遺跡遺構分布図(堀之内1式期)

応を示している。墓の存在は、集落が形成した期間内に死亡した住人を葬った結果であろう。この集落が一時的ではなく、世代を重ねる期間は維持されていたことも示している。一つの住居群を構成する竪穴住居の数がびわ首沢式期より多いことも、これと対応している。

推定人口は、検出された竪穴住居群19軒+掘立柱建物1棟のうち、3群、各竪穴住居3軒程度が同時に機能していたと仮定すれば、竪穴住居の居住者を男女一組の成人あるいは2・3人の同性成人として、この時期の越田和遺跡は最小18人、最大27人となる。いずれにしても成人数 $20 \pm a$ 人程度となる。びわ首沢式期とは、ほぼ同様な想定人口数である。

**堀之内1式期(古相)** 竪穴住居跡1軒、敷石住居跡6軒、掘立柱建物跡3棟、土器棺墓5基、配石墓7基、土坑11基、水場遺構1基である。遺跡西半部の平坦面に集落の主要施設が偏って形成されている。遺跡東半部では顕著な遺構はなくなる。この時期、越田和遺跡の集落は、居住施設の数を減少させている。

一方で住居遺構は、竪穴住居、敷石住居、掘立柱建物と多様化する。これが時期差を示す明確な根拠はない。また堀之内1式新相の土器は、越田和遺跡からは出土していない。各遺構の分布をみると、遺跡北部中央に5号敷石住居跡、6号掘立柱建物跡、それに4・6・9号の配石墓があり、この南西部には1・3号掘立柱建物跡、3・4号敷石住居跡、7・8号配石墓がある。

時期差のある重複例は、33号竪穴住居跡(牛蛭式期)と1号掘立柱建物跡(堀之内1式期)、31号竪穴住居跡(牛蛭式期)と4号敷石住居跡(堀之内1式期)がある。いずれも古い竪穴住居跡と新しい遺構の間には、黒褐色土が介在している。下層の竪穴住居が廃棄され、上層の遺構が構築されるまでに自然堆積により形成された土砂であり、断絶する期間があったことを示している。

5号敷石住居跡の基盤層には、びわ首沢式~堀之内1式の遺物包含層が形成されていた。また敷石上からは、三十稲場式の土器が出土している。堀之内1式期古相でも、最も新しい時期である。他の敷石住居跡は、1・2・3号は、堀之内1式期の遺物が含まれる土層を上面としていた。

掘立柱建物跡のうち1号掘立柱建物跡は、堀之内1式期の遺物包含層に覆われていたことから、同時期内かこれよりも古い遺構である。2・6号掘立柱建物跡は、堀之内1式期の遺物包含層を検出面としている。この上には、堀之内1式期以降に形成された無遺物層が覆っていた。堀之内1式期のなかで造られた遺構であろう。

南部の遺構では、6号敷石住居跡14号配石墓が重複して、6号敷石住居跡の方が古い。また6号敷石住居跡の埋設土器と29号竪穴住居跡から出土した土器片と接合した。6号敷石住居跡の埋設土器は、これが住居にともなう根拠は明確ではないが、それを否定することも難しい。少なくとも、6号敷石住居跡の埋設土器と29号竪穴住居跡は、時期的に近接する遺構であろう。

配石墓は、丘陵から流入した堆積土を除去した段階で検出された。土器が出土したものは、堀之内1式古相である。当時の地表面に配石が露出していたことから、後半のものが含まれている。これに対して水場遺構は、この期間を通して継続していた可能性が高いのではないだろうか。水場施設は、集落の共用施設である。そして水場の北側には、広葉樹の大木があった。その木の根を検出した。

堀之内1式期古相の越田和遺跡において、住居は、1・2・3・4号の平地式敷石住居跡と29号竪穴住居跡、それに竪穴式の5・6号敷石住居跡である。集落を構成する住居が、竪穴住居ばかりで

はなく、掘立柱建物と敷石住居がある点に、この時期の特色がある。想定される集落景観は、多様な建物で構成されることになる。29号竪穴住居跡は周壁があり、6号敷石住居跡も同様である。5号敷石住居跡は、柄鏡形である。立地する地形から見て、柄部に周壁はなかったであろう。他の敷石住居は、遺存状況から詳細は不明であるが、検出面との関係で、すべて平地式である。1・2号敷石住居跡は、石囲炉があり、突出部も確認されている。

竪穴系と平地式住居が同型式のなかで存在していた。季節により異なる住居に住み分けたのだろうか。あるいは堀之内1式期のなかで、急速な住居構造の変化が生じたのであろうか。決め手は見つけられなかった。この土器型式にともなうすべての住居跡が同時に利用されていたわけではないであろうから、同時に機能していた住居は数軒程度であろう。

この時期に特徴的な遺構は、配石墓である。1号敷石住居跡に近接して1・2・3号、29号竪穴住居跡と6号敷石住居跡に近接して、5・14号、2号敷石住居跡では7・8号、5号敷石住居跡と6号、やや離れて4号である。3群の居住施設に対して9基の配石墓が造られている。集落を構成した住居群とそれに対応する居住者の墓である。配石墓は数も少なく、造りも丁寧である。被葬者は各住居群のなかから選別された人々であろう。配石墓の被葬者は各住居群の「長」と推定することが可能であろう。3住居群、2～3世代にわたる集落であろうか。

このように想定して、堀之内1式古相期の越田和遺跡で、同時に機能した住居が数軒程度とすれば、想定される成人数も少なくなる。3群でせいぜい10名程度であろう。びわ首沢式期と牛蛭式期よりは、小規模な集落である。

## ⑤……………柴原A遺跡の集落

**縄文時代集落の地表面** 発掘調査で、当時の地表面が遺存していれば、集落が廃絶する直前、あるいはこれに近い段階の集落施設の配置状況を知ることが出来る。三春町柴原A遺跡は、水成堆積の砂層に覆われた集落跡が遺存していた特殊な例である。この遺跡は、大滝根川北岸の河岸段丘の上にある。下流に河川狭窄部が近接し、この部分で河川が塞ぎ止められて自然ダムが形成されたことにより、当時の集落が水没して、これを覆う砂層が堆積したと推定される。堀之内1式新相期の出来事である。

遺跡の規模は、南北150 m、東西500 m程度の規模である。段丘は北側の丘陵裾部の高位面、東半部の中位面、西部の低位河岸段丘で構成されていた。中位段丘面には、縄文時代中期後半の竪穴住居跡と土坑なども検出されている程度である。遺構の分布は、比較的少ない。表土下は、粘土層で、水性堆積の砂層は存在しない。また対岸の高位段丘面には柴原B遺跡があり、縄文時代中期後半の集落が形成されていた。

縄文時代後期前半の集落は、河岸段丘の低位面に立地していた。大滝根川に沿って東西120 m、等高線に直交する方向で南北50 mの範囲である。集落の東端、大滝根川の上流側には小さな谷があり、この部分で集落が途切れていた。集落の北側から西側にかけては、なだらかな斜面が背後の丘陵に続き、遺構の分布は途切れていた。南端は大滝根川により区画されていた。

縄文時代後期前半の集落を覆う砂層は、標高329.8 mより以下の低位段丘面中央部から大滝根川



北岸にかけて分布していた。選択の進んだ均一な明灰色微砂で、有機物や遺物はほとんど含まれていない。静水状態で堆積した砂層である。砂層の厚さは、30～40cm前後である。この砂層を除去して、縄文時代後期前半の集落地表面を検出した。当時の集落地表面である。集落の西端からは、砂層を除去する過程で、堀之内1式新相の深鉢が旧地表面上に横転した状況で出土した。2号敷石住居跡の埋設土器も同時期である。柴原A遺跡が砂層に覆われたのは、堀之内1式新相期である。

**遺構配置** 検出した主要遺構は、つぎのとおりである。敷石住居跡8軒、竪穴住居跡2軒、配石墓55基、列石3列、焼土面97基、土器棺墓34基、広場1箇所である。遺構は大きく東西に区分されるように分布していた。広場を中心に各種遺構の配置された東部、河川に向って雁行するように配置された敷石住居跡と関連する遺構群からなる西部である。

東部の広場はほぼ円形で、直径は30m程度である。表土は取り除かれ、野外運動場のような地表面となっていた。裸地で、腐植土からなる表土層は形成されていない。この地域の裸地では通常、夏になれば草が繁茂する。その痕跡がないことは頻繁な除草が行われたか、あるいは除草の必要がないほど人々の往来があった場所である。両方であろう。広場の表層を除去すると柱穴や小さな土坑が密集していた。しかし、竪穴住居が造られた痕跡は、1号敷石住居跡付近で、1軒を確認しているにすぎない。縄文時代後期前半以前より、主に居住以外の目的で使用された場所である。

広場の縁辺には、4棟の前方後円形敷石住居跡が配置されていた。すべて広場の方に前方部を向けていた。明らかに広場を意識した配置である。北端に2号、東に1号、西南部に4号、北西部の3号の敷石住居跡である。2号敷石住居跡の連結部東側に接して、上部が開く埋設土器が正位に据えられていた。開口部には遺構面を覆う微砂が詰まっていた。この微砂が堆積した時点で、開口していたことを示している。敷石住居跡の大きさは、3号敷石住居跡が最も小さい。4号敷石住居跡が最大であるが、この遺構の方形部の一部は後の耕作などによって失われていた。

広場の東縁辺には、2号敷石から1号敷石住居跡北辺に1～3号の敷石住居跡とこれを結ぶ列石遺構があった。2号敷石住居跡の連結部から、東に1号列石が一行に伸びていた。そして広場から一段高くなった場所で、弓状に伸びる点状の2号列石が1号敷石住居跡に向かって造られていた。1号敷石住居跡からも、湾曲する3号列石が広場を縁取りって南に伸びていた。この石列の先端には、石がまとまっていた。一方、広場の西端に石列は造られていなかった。

東部の配石墓は、2号敷石住居跡後円部の東側で2号石列の北側に集石群1、4号敷石住居跡の後円部西側に集石群2が形成されていた。1号集石群は、6基の配石墓で構成されている。環状の石列とした配石墓で、6号集石遺構では、内部に小石を敷いていた。2号集石群は、17基の配石墓で構成されている。円形や楕円形に縁取られた石列を基調として、内部にも平石を敷いた例もある。群集する形態で、墓の軸線は一定していない。

このほか、2号敷石住居跡の北側に、東部遺構群から離れて配石墓を1基検出した。集石の下部には、人為的に埋め戻された土坑が造られていた。時期は不明である。また配石墓に近接して、焼土面が2箇所あった。

さらに、広場から一段高くなった北東側には2軒の竪穴住居跡があった。壁面は、なだらかに傾斜しており、床面には石囲炉が造られていた。堆積土は、他の遺構と同じく微砂である。この砂が堆積する時点で、石囲炉部分まで開口していたことになる。壁柱構造の円形竪穴住居跡である。住



写真3 柴原A遺跡 [福島県教育委員会 1989] (一部改変)  
1 柴原A遺跡調査区と周辺地形(上が南)  
2 柴原A遺跡縄文時代後期集落(堀之内1式期新相 上は北西)



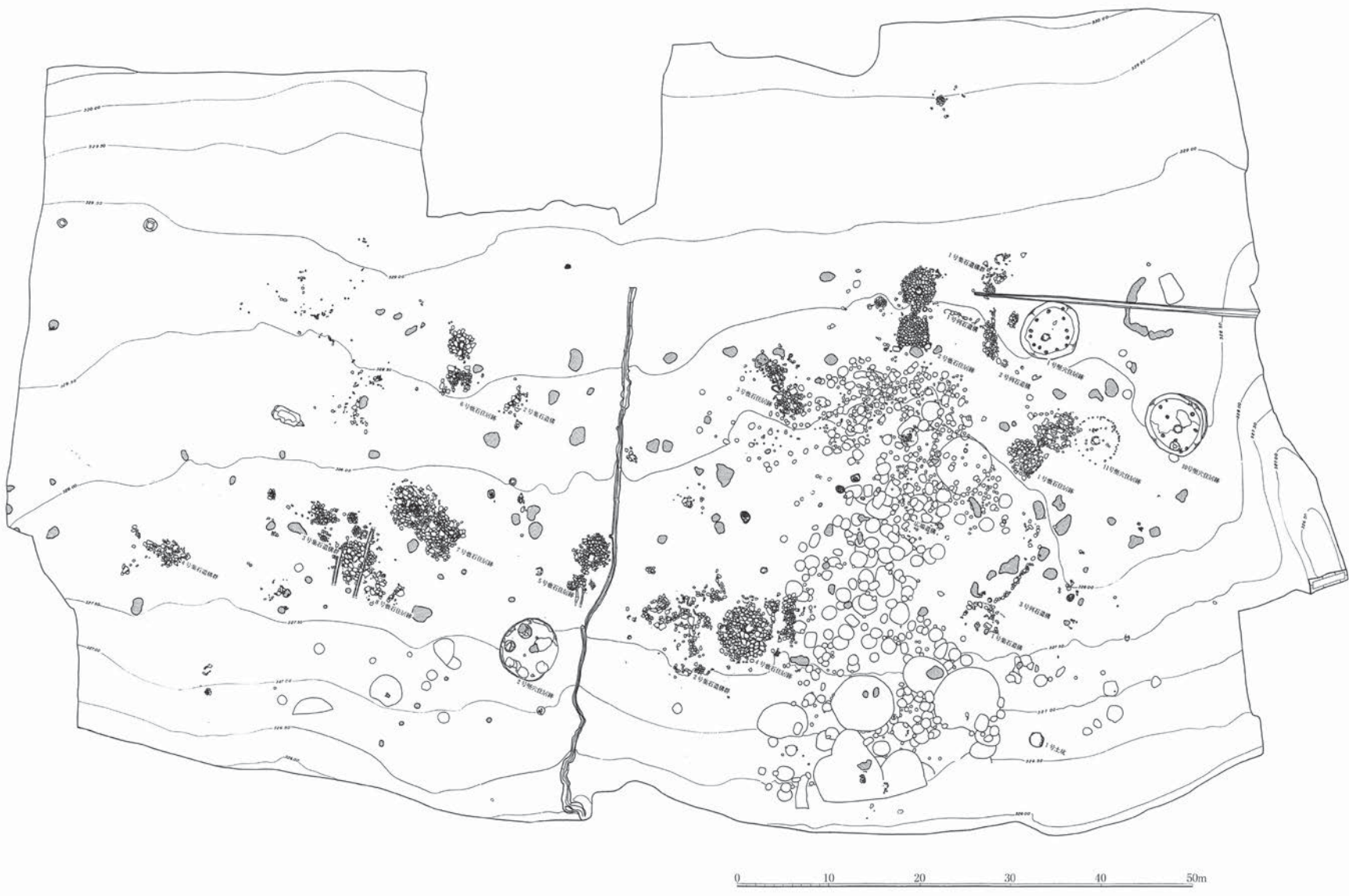


図28 柴原A遺跡

居跡から出土した遺物は、若干の土器片である。

敷石住居跡群と2軒の竪穴住居跡は、同一起源の砂層に覆われていることから、近接した時期の遺構である。この共存・非共存関係が問われよう。この関係を発掘調査報告書〔福島県教育委員会1989〕では不明としたが、現在では次のように考えている。この2軒の竪穴住居跡では、柱穴に砂層の堆積が認められなかった点に注意したい。これに対して堆積した砂層を基盤として造られた加曽利B式期の11号竪穴住居跡では、柱穴に堆積した砂層が明瞭に遺存していた。柱が腐食した後で、周囲の砂層が柱穴に侵入した結果である。一方で2軒の竪穴住居跡では、砂層が堆積する以前に柱の腐食穴は塞がれた状態にあり、砂層の侵入が不可能であったことになる。この2軒の竪穴住居跡は、敷石住居群よりも古い段階の遺構であったことを示していると推定されよう。

西部の敷石住居跡群は、川に向かうように配置されている。東端の5号敷石住居跡は、ほぼ真南に前方部を向け、7・8号敷石住居跡南東部に前方部を向けて並んでいる。これらより離れて7号敷石住居跡の北側に、6号敷石住居跡が東南東に前方部を向けて位置している。5・6号は小型の敷石住居跡である。西部の遺構には、広場や石列は配置されていない。

配石墓群は、8号敷石住居跡に接して西側に3号集石群、これよりやや離れた西端に4号集石群がある。3号集石群は9基の配石墓で構成され、円形の縁石を巡らすものが1基以外は、円形縁石の内部に平石を詰めて造られていた。4号集石群は9基の配石墓で構成され、1基に円形縁石を配置する形であったが、それ以外は平石を集めた造りであった。

配石墓群の普及は、それまでの集落との相違点である。墓地が造られるということは、死後も居住した集落に定住することであろう。びわ首沢式期の集落が移動を繰り返したのに対して、比較的長い期間にわたって集落の維持が継続したのでであろう。配石墓が群集する集団墓であることも、それ以前と比べて集落の形成期間が長くなったことの反映である。また、この時期の集落遺跡数が減少するように見える一因でもあろうか。

焼土面のうち、著しく焼土化の進み、大きさも2m内外の大型焼土面は、東部の広場周辺と西部の2・5・6号敷石住居跡に囲まれた地区に集中している。これらとシカ・イノシシの焼骨、クリ・クルミなどの食用植物炭化物の出土分布がほぼ重なっている。各住居以外に、この場所でも調理がなされ、食事も行われたのであろう。この場所では、地表面に多数の土器片も散布していた。

集落の中核部分、各施設が集中する地区の地表面は、平坦になっていた。これに対して周辺部分、とくに4号集石群より西側では、凹凸した地表面であった。この場所で、樹木の根跡は確認できなかった。裸地ではなく、草原や藪であったと推定した。近年、縄文時代後期にも豆などの栽培植物の確認例が増加しているので、畑に類する施設が設けられていた可能性もあるが、調査を担当した時点では検討を行っていない。また集落内の通路、あるいは集落外を結ぶ道路の痕跡も確認していない。

**出土遺物** 柴原A遺跡から出土した遺物は、大半が縄文時代後期前半のものである。土器類はコンテナ箱で400箱、深鉢が中心である。このほか注口土器、土偶、土製円盤、土錘、耳飾りがある。石器類は約10箱で、石鏃、石匙、斧頭、石鋤、石皿、磨石、石棒、それに玉類が若干である。これに植物種子炭化物や木炭片、獣骨片である。以上は、縄文時代中後期の集落から出土する遺物であり、特異なものは含まれていない。

**集落想定人口** 柴原A遺跡の集落は、2群8基の敷石住居跡、4群、55基の配石墓で構成されている。集落を構成する住人の構成を反映しよう。つまり、柴原A遺跡の集落は、大きく東西2群の住居群にわかれ、さらに住居群は4群の集団墓を形成する小集団となっていた。これと離れて、数基の配石墓も確認されているが、単独墓である。例外的な存在であろう。

柴原A遺跡の敷石住居は、規模に着目すれば大小がある。大型の敷石住居跡は、1・2・4・7・8号の5軒である。円形部がこれより小さな敷石住居跡は、3・5・6号の3軒である。住居の規模に大小があっても、住居1軒当たりの成人居住数は2・3名程度と想定すれば、集落の成人は、最小16名、最大数24名程度となる。これに子供を想定すれば、総数 $20 \pm a$ 名の集落となる。

また、造られた配石墓は55基である。これらすべてが柴原A遺跡の住人の墓であるとは限らないが、この程度の人口規模であれば、成人の大半が配石墓に葬られることも可能であろう。東西の住居群とともに、配石墓群を営んだ4群が集落の基礎的単位であろう。敷石住居跡と配石墓が近接して造られていた4号と8号敷石住居の居住者は、当時の集落のなかで要となった人々であろう。他の敷石住居跡と比べて、この2軒の規模はやや大きい。

柴原A遺跡の集落は、このような住居群や墓群に分かれているが、それが独立して存在していたのではない。東西の住居群の間に焼土面群からは、食物残滓も出土している。東西の住居群の居住者が集まった会食の痕跡である。柴原A遺跡の集落に結集した人々は、生活基盤を共有する濃厚な人間関係を形成していたのである。

## ⑥……………集落の変化

**相対年代と絶対年代** 小論で対象とした集落は、春田Ⅱ式から堀之内Ⅰ式までの4型式期にわたっている。これまで、各遺構や遺跡の相対的な前後関係は把握されていたが、実際の時間幅は不明であった。それが近年の炭素年代測定の普及により、理科学との時間軸として絶対年代による具体的な時間幅が想定されるようになった。この間は、長くて600年、短くて500年程度である。具体的な時間幅が把握できるようになると、遺構の解釈も大きく変更しなくてはなくなる。

たとえば越田和遺跡では、びわ首沢式期の39号竪穴住居跡と重なって牛蛭式期の31号竪穴住居跡があり、さらに4号敷石住居跡が重なっていた。重複関係、土器型式による相対的な前後関係の把握では、この一連の遺構が継続的に営まれたという理解も成り立つ。越田和遺跡では、このほか床面をほぼ共有するように重なるびわ首沢式期と牛蛭式期の竪穴住居跡もある。これは建替えとも理解されよう。つまり、同じ居住者が異なる構造の竪穴住居に造り替えたことである。

ところが、びわ首沢式期の時間幅が100年、牛蛭式期が150年ということになれば、これらの遺構が継続的に建替えを重ねたという解釈は成立しなくなる。土器型式移行の境界でもなければ、同じ竪穴住居に100年以上も居住することになるからである。ヒトの寿命、竪穴住居の耐用年数からすれば、無理な想定である。

三春ダムの周辺では縄文時代中期後半から後期前半にかけて、春田遺跡では春田Ⅱ式期の集落が営まれ、仲平遺跡では春田Ⅱ式期とびわ首沢期、四合内B遺跡ではびわ首沢式期、越田和遺跡では春田Ⅱ式期からびわ首沢式期、牛蛭式期、堀之内Ⅰ式期、そして柴原A遺跡では、大木8b式期か



ら堀之内1式期にわたる各型式の遺構と遺物が確認されている。それは土器型式の継続として把握され、集落も間断なく継続していたようにみえる。

しかし、越田和遺跡のびわ首沢式期の竪穴住居跡は、円形で3本主柱、複式炉で構成され、主柱や複式炉の造り替えも確認されていない。つまり各竪穴住居は、居住に際して修理などの維持管理がなされた痕跡に乏しい特徴がある。このことは、住居の補修を必要としない短期間に居住が終了したことを示している。つまり、びわ首沢式期を通して集落が形成されたのではないのである。びわ首沢期を通して各竪穴住居に重複関係がなかったことも、その反映である。

このことからびわ首沢式期の越田和遺跡では、集落が形成されていた期間は、土器型式期間よりは短く、竪穴住居が補修を必要としない程度の時間幅と考えられよう。1軒の竪穴住居が使用された期間幅は、小林謙一による東京都大橋遺跡の分析では約10年程度であるという〔小林2004〕。地域は異なるが、縄文時代竪穴住居の継続期間について、ひとつの目安であろう。

**集落居住者数** そうであれば、越田和遺跡で抽出したびわ首沢期の各遺構は、比較的短期間における集落の状況を反映していたことになる。集落の主要な遺構である住居や水場などは、この集落が維持されていた時に存在していた数に近いと推定されるし、土坑や墓は集落が形成されていた期間に造られた総数である。

これに対して牛蛭式期では、集落を構成する竪穴住居に修復が加えられている例もある。新旧の炉が確認された越田和遺跡41号竪穴住居跡などである。竪穴住居で修復が繰り返される例は、補修が必要になるほど長期に利用が継続したことの反映である。三春町西方前遺跡では、複式炉をとまう竪穴住居間の重複や造り替えが顕著である。集落が継続して営まれて住居の補修がなされたのであろう。

びわ首沢式期から堀之内1式古相段階期の約500～600年の間で、越田和遺跡で造られた竪穴住居および敷石住居の総数は48軒、掘立柱建物は5棟程度である。掘立柱建物跡は、検出できなかったものもあろうが、竪穴住居と敷石住居は造られたすべてに近い数である。500年前後の期間に集落が継続していた住居数とすれば、あまりにも少ない。土器型式としては継続的ではあるが、集落は継続していたのではなく、連続する各型式期に短期間の集落が営まれたに過ぎないのではないだろうか。また堀之内1式古相期では、多様な住居形態であった。これも断続的に集落が営まれた結果の重なりであるとも理解できよう。

柴原A遺跡の堀之内1式新相期の集落では、敷石住居間の重複がない。改築の痕跡は7号敷石住居跡で、突出部の造り替えの可能性がある程度である。住居の個数は、集落が営まれていた間は、大きな変化は想定できない。しかしこの時期の柴原A遺跡では、越田和遺跡のびわ首沢式期よりは比較的長期にわたってこの時期の集落が営まれた可能性がある。検出された配石墓は、55基である。これらは4群に分かれていた。これが形成される年月の間、集落が維持されていたと考えられよう。8軒の敷石住居からなる集落で、55基の配石墓が形成される年月である。また集落の地表面を検出した時に出土した約400箱の遺物は、大半が堀之内1式の土器であり、その多くが堀之内1式でも前半である。地表面に廃棄された土器が継続して堆積した結果であろう。

びわ首沢式期から堀之内1式期まで、越田和遺跡と柴原A遺跡では、およそ成人10～30名程度で集落が断続して形成されていた。ほかの集落でも大規模な集落は少なく、越田和遺跡と柴原A

遺跡の例は、特異な集落規模ではない。200 軒以上の竪穴住居が検出された大規模集落跡も、同時に存在する住居数は多くても 30 軒程度であり、集落規模はほかの集落と格段の格差があったわけではない〔新井 2005〕。違いは集落の継続期間の差であった。継続的に営まれる集落と短期間に営まれた集落である。居住条件が良好な場所では、長期間にわたって集落が営まれた結果である。そのような集落の数は少ない。大半は、移動を繰り返す短期間集落が基本形態であった。

集落内の竪穴住居は、いくつかが近接して造られている。日常生活でのまとまりを示す住居群であろう。縄文時代の人々は、個人や世帯のみで生活を営むことは困難であった。竪穴住居や近接する竪穴群の上に、ひとつの集落が形成される。他の集落とは別に、1 個の集落を形成するには、何らかの紐帯がなければならない。縄文時代にあって、このような小規模な集落を形成する原理は、近い血縁関係であろう。これにより、阿武隈川上流域の環境に働きかけた生活を営んだのである。

**地域色** 阿武隈川上流域では、縄文時代中期末葉から後期前半にかけて、土器型式の変化では 4 型式前後の間に、集落の様子は大きく変化する。土器型式の相対的な変化からみれば、その変化は急激であった印象が強い。しかしこの期間が 500 年程度であれば、それは緩やかな変化である。

阿武隈川上流域は、仙台湾沿岸と関東地方北部を結ぶ南北の交流路であった。そして西に向かえば、奥羽山脈を越え、阿賀川流域を介して北陸方面にも通じている。縄文時代を通して、これら周囲の地域との交流があった。土器についてみるならば、阿武隈川上流域は、大木系の分布圏の南端にあったが、関東地域と阿賀川・信濃川流域との交流も盛んであった。この地域は、縄文時代の各時期を通してみるならば、周辺地域の文化要素が混在する特色があった。

縄文時代中期後半、上原型複式炉をともなう竪穴住居からなる集落もこのような地域間交流によって成立した。信濃川流域の土器を埋設する炉と東北地方の前庭部を持つ炉とがひとつになり、さらに石囲部に貼石を施す工夫を加えて誕生した。ひとつの場所で、独自の工夫を重ねて生み出されたのではない。こうして成立した複式炉をともなう生活様式は、周辺地域にその分布圏を拡大する。そうして、関東平野や仙台湾沿岸とも異なる、独自の地域色を確立した。

上原型複式炉の主要分布圏は、阿賀川流域から阿武隈高地にかけてである。仙台湾沿岸地域では、分布圏が拡大するびわ首沢期に一時的に受容されるが、短期間である。さらに上原型複式炉は、春田Ⅱ式・びわ首沢式の分布範囲とも重なっている。仙台湾地域の大木 9 式・10 式とは、土器型式の内容が異なっている。同様に、上原型複式炉の分布が希薄な福島県いわき市方面は、加曽利 E 系土器の分布圏である。縄文時代中期末葉において、阿武隈川上流域では、仙台湾沿岸の大木諸型式、関東方面の加曽利諸型式の土器型式をそのまま適用することは出来ないのである。土器型式や文化圏は、時間と空間によって限定されている。これが現在の地域区分と異なるのは当然である。したがって、土器型式の適用や設定や遺構の分析にさいして、それらが分布する空間的範囲を検討することが必要となる。小論で、大木 9・10 型式とは別の土器型式を設定し、上原型複式炉の概念をより限定して分析を加えた理由である。

縄文時代後期前半、堀之内 1 式土器が普及するなかで、阿武隈川上流域の住居様式は独自の地域性を保持していた。少なくとも、関東の敷石住居をそのまま導入するのではなく、変形を加えて受容した。また、北陸方面と結びついて、掘立柱建物も急速に普及する。竪穴住居の掘形も浅くなる。牛蛭式期の阿武隈川上流域において、関東的な居住様式が採用された時点で、阿武隈川下流域は大

木10式土器圏であり、退化的な複式炉をともなう従来の居住様式が継続していた。阿武隈川上流域と下流域では、明確な地域差があった。阿武隈川下流域に関東的な土器が波及するのは、南境式期になってからである。それも、在地の土器と融合した土器に変化している。また前庭部が大きく発達した平地式敷石住居は、仙台湾沿岸では採用されなかった。段階的な変化、在地の要素を土台にした変化である。文化圏の北上であっても、住民の入れ替えや交代という現象ではない。

文化は変化する。それぞれの環境に働きかけて工夫を重ねることにより、人々の生活は変化する。様々な小さな改良の積み重ね、その失敗も成功も合わせて変化する。そして時には、短期間で激変もする。変化の状況を明らかにすることは比較的容易である。ただし、変化の要因を特定すること、さらに変化の法則を知ることは容易ではない。大きな要因もあれば、些細な偶然から変化の方向が定まることもある。

## おわりに

以上、東北地方南部の丘陵地帯を例に、縄文時代中期末葉から後期初頭にいたる集落変化を見てきた。今も昔も、人が生きていくためには、お互いの不足を補い、協力関係を構築することは不可欠である。人々が結集し生活を営んだ場所が集落である。集落は日常生活の基盤であった。集落のあり方には、生業や文化、社会構造が反映されているはずである。各時代の社会的特性を端的に示す場所が、集落遺跡のはずである。

発掘調査によって、集落を構成する各種の施設と生活用品の一端が明らかになる。住居跡や水場、焚き火跡、ゴミ捨て場、墓など当時の日常生活にともなう各種の痕跡である。集落遺跡から検出される遺構や遺物は、その住人の生活や各種活動の痕跡である。ところが、住居に住んだ住人の数や性別、人々の結びつきについては、これを復元する直接の手がかりはない。墓および墓群についても、葬られた人の性別や年齢が判明することはあっても、人々の関係や結びつきを知る手段は限られている。

また集落を構成する竪穴群や遺構の同時存在を証明することも困難がともなう。そもそも同時存在を追及することに、どのような意味があるのであろうか。いつの時点の同時を追及するのであろうか。集落は常に変化する。季節により、住人の誕生と成長、死亡、離別により集落の住人も、復元される景観も変化する。集落の瞬間的な姿、この時点、「いま」と言葉を発した瞬間、それは既に過去となる。これまでの集落研究で追求されてきた「一時期」とは、どのような時間であらうか。分析の前に、それを示さなければならない。

集落がたえず変化するのであれば、一瞬を凍結するのではなく、変化する過程自体を追求することが求められよう。集落の形成から終末にいたる過程にこそ、集落の本質が示されている。この場所に、この時点で集落が造られた理由、集落を構成する住人数増減と構成関係、環境に対応した変化、各種多様な生活活動の内容、集落の形成が終了する要因などである。個々の集落遺跡について、これらの基本事項を踏まえた分析が、集落研究の前提となる。

越田和遺跡と柴原A遺跡は、筆者が発掘調査を担当した遺跡である。三春ダム建設にともなう発掘調査であり、遺跡の記録保存を目的とした調査であった。記録保存とは、遺跡・遺構を報告書に



記録すること、そして遺跡・遺構が復元可能な資料を作成することである。発掘調査で明らかになったのは、土器型式期ごとの集落である。

そこから、当時の人々の姿を復元するまでには大きな限界がある。集落の実態変化を把握するには不十分な資料であった。集落の研究資料とするには、さらに詳細な記録と調査方法が必要である。遺構については、形成された個々の土層の広がりや厚さ、空間的把握と形成要因の追及がなければ、構築と使用過程、そして廃棄とその後の状況にわたる一連の過程を把握することは困難であった。また遺構・遺物についても、作り方とともに使用痕跡の追及が不可欠であった。生活のなかで人間の行動を明らかにして、遺跡にその姿を蘇らせたいためである。今後の反省としたい。

#### 参考文献

- 赤山容造 1982「堅穴住居」『縄文文化の研究 社会・文化』8 雄山閣
- 相原淳一・加藤明弘 1988「考察」『大築川・小築川』宮城県文化財調査報告書第126集
- 相原淳一 2001「東北地方における集落変遷の画期と研究の現状」『縄文時代集落研究の現段階』縄文時代文化研究会
- 阿部昭典 1999「複式炉の研究」『新潟県考古学談話会会報』第20号 新潟県考古学談話会
- 阿部昭典 2000「縄文時代中期末葉～後期前葉の変動―複式炉を有する住居の消失と柄鏡形敷石住居の波及―」『物質文化』第69号
- 新井達哉 2005「福島県における複式炉と集落の様相」『日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集』
- 荒木 隆 1998「初期複式炉の発生と展開（予察）」『福島考古』第39号 福島県考古学会
- 池谷信之 1988「東北地方における縄文時代中期末葉時の変遷と後期土器の成立」『沼津市博物館紀要』12
- 石井 寛 1982「集落の継続と移動」『縄文文化の研究』8 雄山閣
- 石井 寛 1989「縄文集落と掘立柱建物跡」『調査研究集録』第6冊 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
- 石井 寛 1992a「称名寺式土器の分類と変遷」『調査研究収録』第9冊 横浜市ふるさと歴史財団
- 石井 寛 1992b「縄文集落からみた掘立柱建物跡」『先史日本の住居とその周辺』奈良国立文化財研究所
- 石井 寛 1998「柄鏡形住居址・敷石住居址の成立と展開に関する一考察」『縄文時代』第9号 縄文時代文化研究会
- 石井 寛 2001「関東地方における集落変遷の画期と研究の現状」『縄文時代集落研究の現段階』縄文時代文化研究会
- 石井 寛 2003「東北地方における礫石附帯施設を有する住居址とその評価」『縄文時代研究』第14号 縄文時代文化研究会
- 石井 寛 2007「後期集落における二つの住居系列」『縄文時代研究』第18号 縄文時代文化研究会
- 市川金丸 1978「三内澤部遺跡発掘調査報告書」『青森県文化財調査報告書』第41集
- 伊東信雄 1957「縄文時代」『宮城県史』1 宮城県
- 井 憲治 1996「真野川上流域における縄文中期末葉の集落構成」『論集しのぶ考古』同刊行会
- 今村啓爾 1977「称名寺土器の研究 上下」『考古学雑誌』第63巻1・2号 日本考古学会
- 岩淵一夫 1996「縄文時代中期の社会構造比較試論」『論集しのぶ考古』同刊行会
- 梅宮 茂 1960「飯野白山住居跡報告」『福島県文化財調査報告』第8集 福島県教育委員会
- 梅宮 茂 1974「複式炉文化論」『福島考古』15 福島県考古学会
- 江原 英 2001「縄紋中期後半における住居諸形態の観察」『研究紀要』第13号 財団法人とちぎ生涯学習財団 埋蔵文化財センター
- 海老原郁雄 1998「南限の複式炉」『しのぶ考古』11 しのぶ考古学会
- 菅野智則 2003「縄文集落研究の初期的操作」『歴史』第101輯 東北史学会
- 押山雄三 1990「福島県の複式炉」『郡山市文化財研究紀要』第5号 福島県郡山市教育委員会
- 日下部善己 2003「複式炉以前」『福島考古』第44号 福島県考古学会
- 櫛原功一 1994「縄文中期の環状集落と住居形態」『山梨考古論集』Ⅲ 山梨県考古学協会
- 黒尾和久 1988「縄文時代中期の居住形態」『歴史評論』454号 歴史科学協議会
- 黒尾和久 2001「集落研究における「時」の問題」『縄文時代集落研究の現段階』縄文文化研究会

- 
- 群馬県企業局 1980『三原田遺跡（住居篇）』第一巻
- 小暮伸之 2003「外縁地域の大木式土器」『福島県文化財センター白河館研究紀要 2002』
- 後藤信祐 1995「那須地方の複式炉」『栃木県立なす風土記の丘資料館第3回企画展』栃木県教育委員会
- 後藤信祐 2001「槻沢遺跡における竪穴住居建替えに関する覚書」『研究紀要』第9号 財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 後藤信祐・江原英 2001「栃木県における縄文時代集落の諸様相」『列島における縄文時代集落の諸様相』縄文時代文化研究会
- 後藤信祐 2005「堂ヶ原遺跡の複式炉の再検討」『研究紀要』第13号 財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 後藤信祐 2010「加曾利Eの複式炉・大木の複式炉」『研究紀要』第18号 財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター
- 後藤和民 1982「縄文集落の概念」『縄文文化の研究 社会・文化』8 雄山閣
- 小林謙一 1999「縄文時代中期集落における一時的集落景観の復元」『国立歴史民俗博物館研究報告』第82集
- 小林謙一 2004『縄文社会研究の新視点』六一書房
- 小林謙一 2006「関東地方縄文時代後期の実年代」『考古学と自然科学』第54号 日本文化財科学会
- 小林達雄 1986「原始集落」『岩波講座 日本考古学』4 岩波書店
- 坂本真弓 2002「沢部型複式炉の現在」『海と考古学とロマン』市川金丸先生古稀を祝う会
- 佐々木藤雄 1984「方形柱列と縄文時代の集落」『異貌』第11号 共同体研究会
- 佐藤 啓 1998「集落研究における複数住居群の検討」『しのお考古』第11号 しのお考古学会
- 志賀敏行 1992「東北地方南部における縄文時代中期末葉の土器様相」『峰史』17
- 縄文時代文化研究会 1999「縄文時代研究の100年」『縄文時代』第10号 縄文時代文化研究会
- 縄文時代文化研究会 2002「縄文時代集落研究の現段階」『縄文時代』第15号
- 菅原祥夫 2003「複式炉の成立とその意味」『福島考古』第44号 福島県考古学会
- 鈴木良一 1986「複式炉と敷石住居跡」『福島の研究』第1巻 清文堂
- 鈴木保彦 1985「縄文集落の衰退と配石遺構の出現」『日本史の黎明 一八幡一郎先生頌寿記念考古学論文集一』
- 鈴木保彦 1988「定形的集落の成立と墓域の確立」『長野県考古学会誌』第57号 長野県考古学会
- 須藤 隆 1985「東北地方における縄文集落の研究」『東北大学考古学研究報告』1
- 関野 克 1938「埼玉県福岡村縄文前期住居址と竪穴住居の系統について」『人類学雑誌』第53巻第8号 東京人類学会
- 谷口康浩 1986「縄文時代「集石遺構」に関する試論」『東京考古』4 東京考古学談話会
- 谷口康浩 1998「環状集落形成論—縄文時代中期集落の分析を中心として—」『古代文化』第50巻第4号（財）古代学協会
- 谷口康浩 2001「環状集落の空間構成」『縄文時代集落研究の現段階』縄文時代文化研究会
- 都築恵美子 1990「竪穴住居跡の系統について」『東京考古』8 東京考古学会
- 栃木県教育委員会 1980「槻沢遺跡」『栃木県埋蔵文化財調査報告』第34集
- 栃木県教育委員会 1996「槻沢遺跡Ⅲ」『栃木県埋蔵文化財調査報告』第171集
- 仲田茂司 1986「福島県における配石遺構について」『北奥古代文化』17
- 仲田茂司 1992「敷石住居跡に関する二、三の問題」『同志社大学考古学シリーズ』V 同志社大学考古学研究室
- 仲田茂司 1996「縄文中期社会の変容」『論集しのお考古』同刊行会
- 中村良幸 1982「「複式炉」について」『考古風土記』第7号
- 日本考古学協会 2005年度福島大会実行委員会 2005「シンポジウム1「複式炉と縄文文化」」『日本考古学協会 2005年度福島大会シンポジウム資料集』
- 丹羽 茂 1971「縄文時代における中期社会の崩壊と後期社会の成立に関する試論」『研究紀要』第1冊 福島大学考古学研究会
- 丹羽 茂 1974「福島県における縄文時代中期の住居・集落の現状と問題点」『福島考古』第15号 福島県考古学会
- 丹羽 茂 1981「大木式土器」『縄文文化の研究』第4巻 雄山閣
- 丹羽 茂 1989「中期大木式土器様式」『縄文土器大観』1 小学館
- 丹羽佑一 1978「縄文時代中期における集落の空間構成と集団諸関係」『史林』第61巻第2号 史学研究会
- 丹羽佑一 1982「縄文時代の集団構造—中期集落に於ける住居址群の分析より—」『考古学論考』平凡社
-

- 
- 丹羽佑一 1994「縄文集落の基礎単位の構成員」『文化財科学論集』文化財学論集刊行会  
能登谷宣康 1996「縄文時代中期末葉の竪穴住居跡にみられる特殊施設」『論集しのお考古』同刊行会  
橋本幸夫 1998「建築企画からみる縄文期の竪穴住居跡」『福島考古』第39号 福島県考古学会  
林 謙作 1968「縄文文化の発展と地域性—東北」『日本の考古学』Ⅱ河出書房  
早瀬・菅野・須藤 2006「東北大学文学研究科考古陳列館所蔵 大木囲貝塚出土基準資料」『Bulletin of the Tohoku University Museum』No.5  
日立市教育委員会 2002「上の内遺跡」『日立市文化財調査報告』第61集  
福島県教育委員会 1984「上ノ台A遺跡（第1次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告』Ⅴ  
福島県教育委員会 1985「小田口D遺跡」『母畑地区関連遺跡発掘調査報告』18  
福島県教育委員会 1986「日向南遺跡（第1・2次）」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告』Ⅷ  
福島県教育委員会 1989「柴原A遺跡」『三春ダム関連遺跡発掘調査報告』2  
福島県教育委員会 1990「春田遺跡」『三春ダム関連遺跡発掘調査報告』3  
福島県教育委員会 1991「仲平遺跡3次」『三春ダム関連遺跡発掘調査報告』4  
福島県教育委員会 1993「四合内B遺跡」『三春ダム関連遺跡発掘調査報告』7  
福島県教育委員会 1996「越田和遺跡」『三春ダム関連遺跡発掘調査報告』8  
福島県教育委員会 2003「高木遺跡」『阿武隈川右岸築堤遺跡発掘調査報告』3  
福島県教育委員会 2003「前山遺跡」『常磐自動車道遺跡発掘調査報告』35  
福島県立博物館 1985「塩沢上原A遺跡発掘調査概報」『福島県立博物館調査報告』第10集  
福島県飯野町教育委員会 2003「和台遺跡」『飯野町埋蔵文化財調査報告書』第5集  
福島県郡山市教育委員会 1980「びわ首沢遺跡」  
福島県郡山市教育委員会 1982「上納豆内遺跡・仁井町遺跡」『河内下郷遺跡群』Ⅱ  
福島県郡山市教育委員会 1987「倉屋敷遺跡」『郡山東部』7  
福島県郡山市教育委員会 1997「一ッ松遺跡 —発掘調査報告書—」  
福島県郡山市教育委員会 2005「町B遺跡」  
福島県滝根町教育委員会 1984「観音山遺跡」『滝根町文化財調査報告』第1集  
福島県船引町教育委員会 1990「船引・堂平遺跡」『船引町文化財調査報告』第8冊  
福島県三春町教育委員会 1975「堂平敷石遺跡発掘調査報告書」  
福島県三春町教育委員会 1989「シンボジウム 縄文の配石と集落」  
福島県三春町教育委員会 1989「西方前遺跡Ⅲ 図版編」『三春ダム関連遺跡発掘調査報告書』第12集  
福島県三春町教育委員会 1992「西方前遺跡Ⅳ 本文編」『三春ダム関連遺跡発掘調査報告書』第16集  
福島雅儀 1987「阿武隈川上流域における縄紋時代中期後半の土器」『同志社大学考古学シリーズ』Ⅲ  
福島雅儀 2005「復元的視点による竪穴住居跡の発掘調査」『研究紀要2004』福島県文化財センター白河館  
藤本 強 1982「総論」『縄文文化の研究 縄文人の精神文化』9 雄山閣  
藤根久・佐々木由香 2005「複式炉の年代」『日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集』  
本間 宏 1991「土器型式設定上の基本原則」『福島考古』第32巻 福島県考古学会  
本間 宏 1994「大木10式土器の考え方」『しのお考古』10 しのお考古学会  
本間 宏 2008「南境式・網取式」『総覧縄文土器』株式会社アム・プロモーション  
麻柄一志 1992「土屋根の竪穴住居」『魚津市立博物館紀要』第3号 魚津市立博物館  
馬目順一 1968「網取貝塚第四地点発見の堀之内1式土器」『小名浜』  
馬目順一 1982「南東北」『シンボジウム堀之内1式土器』市川市立博物館  
馬目順一 1991「上田郷Ⅰ遺蹟の調査」『広野町文化財調査報告』第1冊  
目黒吉明 1969「上原遺跡調査概報」福島県二本松市教育委員会  
目黒吉明 1982「住居の炉」『縄文文化の研究』第8巻 雄山閣  
水戸部秀樹 2006「複式炉の復元について」『研究紀要』第4号 財団法人山形県埋蔵文化財センター  
南那須町教育委員会 1993「室ノ木A遺跡」『南那須町埋蔵文化財調査報告』第10集  
森 貢喜 1974「縄文時代における敷石遺構について」『福島考古』第15号 福島県考古学会  
森 幸彦 2008「大木9・10式土器」『総覧縄文土器』株式会社アム・プロモーション  
森嶋 稔 1982「幅田遺跡」『長野県史考古資料編』全1巻（2） 長野県  
柳沼賢治 1984「谷地遺跡」『郡山東部』Ⅳ 福島県郡山市教育委員会
-



- 
- 八巻一夫 1973「東北地方南部における縄文時代中期末葉の集落構成」『福島考古』第14号 福島県考古学会  
八巻一夫 1977『和台遺跡，稲神古墳発掘調査報告書』  
山本暉久 1976「敷石住居出現の持つ意味」『古代文化』第28巻第2・3号 (財)古代学協会  
山本暉久 2000「外縁部の柄鏡形（敷石）住居」『縄文時代』第11号 縄文時代文化研究会  
山本暉久 2002『敷石住居址の研究』六一書房  
山本暉久 2010 柄鏡形（敷石）住居と縄文社会，六一書房  
柳沢清一 1980「大木10式土器論」『古代探叢』早稲田大学出版部  
柳沢清一 1987「東北縄文中・後期編年の諸問題その1」『古代』84 早稲田大学考古学会  
山内清男 1937「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』第1巻第1号

(元, (財)福島県文化振興事業団, 国立歴史民俗博物館共同研究員)

(2010年9月27日受付, 2011年5月20日審査終了)

【追記】校正時に下記の論文を知った

高橋保雄 2007「縄文時代中期後葉～後期初頭の炉の返還」『研究紀要』第5号 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団  
新潟県阿賀町北野遺跡の調査から表題について論じたものである。土器埋設部+石敷部+石組部→土器埋設部+石敷部→土器埋設石囲炉という変化が明らかにされている。阿武隈川上流域と基本的に同じ変化である。

## **Change of Colony in the Upper Reaches of the Abukuma River from the Middle to the Late Jomon Period : From the Excavation Survey of the Shibahara A Site and the Koshitawa Site in Miharumachi, Fukushima Prefecture**

FUKUSHIMA Masayoshi

The central facilities of a colony in the last years of the middle Jomon period were house-pits having multiple hearths. The other facilities which were found are only water place constructions and earthenware coffin tombs. The landscape had fewer variations. At the beginning of the late period, house-pits of four main pillars having stone enclosure hearths were constructed and outdoor earthenware coffin tombs increased. Dug-standing pillar buildings were also accepted. Subsequently, in the first half of the late period, dug-standing buildings increased, and mirror-handled shaped dwellings paved with stones and tombs with arranged stones were also introduced. Furthermore, in the second half of the late period, at the new stage of Shibahara A site, it changed to a colony having flat land type dwellings paved with stones, open fields, stone columns, groups of tombs with arranged stones and soil burning surfaces.

It was said that multiple hearths were widely distributed in the Tohoku region, but as far as the Uehara type is concerned, it was a hearth specific to the area from the upper reaches of the Abukuma River to the upper reaches of the Mogami River and the reaches of the Aka River. Four-pillar house pits having stone enclosure hearths were distributed only in the upper reaches of the Abukuma River. Concerning dwellings paved with stones, flat land type dwellings paved with stones having enlarged mirror handles were also distributed mainly in the upper reaches of the Abukuma River. Earthenwares decorated with aggregated incised-lines having local characteristics were made. The upper reaches of the Abukuma River were the passage connecting the coastal area of Sendai Bay and the Kanto Plain, and they created a unique lifestyle different from that in the northern and southern areas at this time.

Key words: Jomon colony, multiple hearths, dwelling paved with stones, Shibahara A site, Koshitawa site